



令和6年7月29日

三重大学  
三翠同窓会発行☎ 059-231-9677  
振替 00850-6-8198

## ご挨拶

三翠同窓会長  
前川 行幸

三翠同窓会報第17号発行にあたり一言ご挨拶申し上げます。三重大学三翠同窓会の皆様には、ますますご健勝にお過ごしのことと心よりお慶び申し上げます。平素より本会の活動につきましては多くのご協力をいただき厚く御礼申し上げます。また会員の皆様がたは、国内はもとより広く海外にまでその活躍の場を広げられていることは誠に喜ばしい限りであります。

三重大学大学院生物資源学研究所の歴史は100年を超えました。ひとえに100年と申ししても大正10年1921年三重大等農林学校設置にその端を発し、以来多くの卒業生を輩出し、その人数たるや2万数千名に達しております。私もそのうちの一人です。私は昭和47年1972年、三重大立水産学部卒業です。古い話です。この年に三重大立水産学部は国立移管され、さらに昭和62年1987年に農学部と水産学部が統合され全国初の学部統合により生物資源学部が改組されました。本学に65歳まで教員として、その後5年間の産学連携コーディネータを経て、指折り数えますと学生時代を入れると約50年この大学にお世

話になりました。本学100年の歴史の約半分をこの大学で過ごさせていただきました。ありがたいことです。

私が入学した三重大立水産学部の場所は現在県立美術館のあるところで、木造2階建ての一般講義棟と池の畔に赤い屋根の瀟洒な専門校舎がありました。農学部は今と同じ場所にあり、現在の三重大学キャンパスは当時はだだっ広い付属農場でした。本学の歴史を物語る建物として三翠会館が本学正門近くにありまます。この建物は昭和11年1936年に同窓生の献金により建築されたもので有形文化財に登録されています。内部には三翠同窓会の本部事務局があり、生物資源学研究所の歴史を物語る資料が数多く展示されております。キャンパス南門近くにもう一つの有形文化財、旧帝国ホテルの建設に携わったアントニン・レーモンドが設計したレーモンドホール(旧三重大立水産学図書館)もあり、一度ぜひお立ち寄りください。

さて、同窓会というのは大学の社会における最大の応援団と考えております。同窓会は卒業生の親睦だけでなく母校並びに卒業生の発展を図り支援することが大きな目的であります。今後とも同窓会としては、母校と連携しながら卒業生のみならず在学生も含めて母校の発展に寄与していきたいと考えております。そのためにも同窓生の方々、本学教職員および関係機関の皆様方の同窓会へのご理解とご支援を切にお願い

## ご挨拶

生物資源学研究所長  
学部長  
松村 直人

三翠同窓会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

平素より、生物資源学部・生物資源学研究所のことを気にかけていただき、ご理解とご支援を賜りまして、心より御礼申し上げます。また、1921年(大正10年)に三重大等農林学校として設置されて以来、100周年の各種記念行事へのご参画、ご寄附等のご支援をいただきましたこと、前川行幸三翠同窓会長はじめ、菊田修一学内代表理事、構成同窓会各位に篤く御礼申し上げます。

さて、この4月より、研究科長・学部長として3年目を迎えております。木村哲哉副研究科長(教育担当)、柿沼 誠副研究科長(研究担当)、橋本 篤評議員、渡辺晋生附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター長、研究科長補佐として、名田和義教授(学生委員会)、松田陽介教授(学部教育)、塚田森生教授(国際交流)、木佐貫博光教授(研究広報)、全学的立場でのご意見が伺える方として、酒井俊典理事、吉岡 基理事を加えた執行部体制で研究科の運営にあたっております。

研究科の事務部門も、研屋元広事務長が交代し、谷 仁氏を後任に迎え、一丸となっ

いたします。今後の本学の益々の発展を祈念いたしまして同窓生代表の私からの挨拶とさせていただきます。

て研究科・学部の管理運営に取り組んでいただいております。

現在、三重大学を始め、国立大学法人は1期6年の中期計画・中期目標を掲げて運営されており、今年度から第4期3年目に入っております。様々な指標に基づき、途中で中間的暫定評価を受け、最終評価の後に、評価結果を次期の運営費交付金の一定枠の配分に反映させるという厳しい状況になっております。

本学部は三重県にある地方大学という側面と、前身の三重大等農林学校から100周年を迎えた全国でも伝統ある農学系学部でもあります。近隣の大学にはない、農水産・環境・食品という特徴を持つ「総合農学」の学部であり、今後も地域の中核大学として、発展させていきたいと思います。

また、全学の地域拠点サテライト活動とも連携しつつ、実学を重視する農学の伝統を活かし、三重県のみならず、紀伊半島や国際協力も見据えたフィールド研究、社会実装に貢献して参ります。

ポストコロナということで、最近では海外からも多くの交流をいただいております。卒業生が各国で活躍されていますが、タイ、インドネシア、マレーシア、中国などのアジア圏に加え、南米三重大同窓会関係からも次世代を担う若手の方々の訪問団を受け入れました。ブラジル三重県人会の創立80周年と三重県人移住110周年、三重県との姉妹提携50周年の記念も兼ねて、一見勝之三重県知事もブラジル・サンパウロ州を訪問されました。

最後に、三翠同窓会の会員の皆様には、同窓会活動をさらに活発化させていただき、共に生物資源学部・研究科の発展を支えていただくことをお願いし、併せて、皆様のご健勝とご発展を祈念しまして、ご挨拶とさせていただきます。

## 会 告

三重大学三翠同窓会会員各位

三重大学三翠同窓会会長 前 川 行 幸

三重大学三翠同窓会総会を下記のとおり開催しますのでご出席をお願いします。

記

- 日 時 令和 6 年 9 月 7 日 (土) 午後 2 時 30 分から (三翠同窓会三重県支部会総会終了後)  
 時 場 三重大学生物資源学部 大講義室 (2 階)  
 議 題 1. 令和 4・5 年度事業報告及び会計報告について  
 2. 役員改選について  
 3. 令和 6・7 年度事業計画及び予算案について  
 4. その他

令和 6 年 7 月 29 日

# 専攻等近況報告

## 資源循環学専攻

専攻長 中 島 千 晴

同窓会会員の皆さまにおかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。資源循環学専攻ならびに資源循環学専攻の教育研究活動へのご理解とご協力を賜り、心より厚く御礼申し上げます。本専攻・学科の近況についてご報告申し上げます。

大学院生と教員が所属する現在の 3 講座体制 (農業生物学・森林資源環境学・国際・地域資源学講座) は平成 27 年 (2015 年) に始まりました。学部の組織としては資源循環学専攻として、それぞれの講座が教育コースという形で独立し、教育と研究を行ってきました。いっぽう、国から配分される交付金の減少や教員数の削減の要求、また、大量に生成され続ける様々なデータの活用、人工知能に代表される新たな解析技術に対応する教育の実施が社会的に求められており、改組により新たな枠組みでの教育体制を構築することとなりました。令和 6 年度からは生物資源学部は 1 学科体制に移行し、資源循環学専攻・学科という体制は学部 2 年次以上の学生と大学院生となりました。新体制では、森林環境科学コースとして、資源循環学専攻と共生環境学専攻の多くの教員により構成され、農学、森林学、農業土木・環境情報システム工学が融合するコースとなりました。大学の教育と知の鍛錬の本丸が研究室であることを考えると、それぞれの研究室の専門性を維持したまま、連携による研究力と教育力の強化をはかるものと理解しています。

コロナ禍での混乱においても、資源循環学専攻・学科は対面を中心にオンラインでの講義、対面での学生実験、農場実習・演習林実習を諦めることなく実施し、教職員と学生が一致協力して乗り越えることができました。今ではすっかり以前の姿に戻りましたが、画像等が鮮明なデジタル教材やオンライン学修管理システムの活用はすっかり定着しました。その情報技術により研究室においては、教員と学生の距離が縮まり、フラットな関係になり、学生からは研究の経過や上手くいかないことの相談が容易に届き、グループ内で共有できるようなりました。しかしながら、失われてしまっただと思われることも少なからずあります。学生同士のつながりです。学生同士の横のつながりが弱くなって、上級生に研究の手順で判らないことを尋ねたり、同級生と教えあうということに苦手意識があるようです。研究上のコツといったものが途絶え、驚くようなことが共有されていないことがあります。今後は、真のネットワーク、つまり網目状構造を何層にも重ねて行く努力が必要だと感じているところです。

資源循環学専攻の就職率は、コロナの影響のあった令和 4 年度分の集計でも就職希望者のうち 98% に達し、うち公務員が 26% を占め、続いて製造業、卸・小売業、48% が東海圏へ就職します。進学は学部卒業生のうち 30% で、大学院生の就職傾向も学部と同様となります。このように資源循環学専攻・学科は地域共創に主体的に、そして積極的に寄与する有為な人材を輩出してまいります。様々な場面で卒業生の皆様にお会いする機会があるかと思えます。ご縁がありましたら、皆様から後輩へのご指導や励ましを賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

専攻内の人事異動では、令和 6 年 3 月をもって森林利用学の石川知明教授が定年によりご退職になり、令和 6 年 4 月には、板谷明美先生が森林利用学の教授に昇格されました。また、令和 6 年 3 月には生物資源経済学の中島亨准教授が異動のため退職されました。令和 6 年 4 月から洲上佑樹准教授が附帯施設演習林より森林総合環境学に配置換えとなりました。また、循環経営社会学の野中章久先生が教授へ昇格 (令和 6 年 3 月) 後に地域イノベーション学研究所へ転籍 (2024・4) されましたが、学部教育については引き続き教育に携わっております。

研究科内の運営面では、松村直人教授が研究科長を引き続き務めておられ、名田和義教授が研究科長補佐 (学生)、松田陽介教授が研究科長補佐 (学部教育・FD)、木佐貫博光教授が研究科長補佐 (研究広報) に就かれており、日々、ご尽力をいただいております。現在 (2024・4・1) の専攻の教員構成を記します。

■ 農業生物学講座

- 分子遺伝育種学
- 掛田 克行 教授、諏訪部 圭太 教授 (地域イノベーション学研究所)
- 資源作物学
- 梅崎 輝尚 教授、長屋 祐一 准教授
- 園芸植物機能学
- 名田 和義 教授
- 動物生産学
- 松井 宏樹 教授、伴智美 准教授
- 草地・飼料生産学
- 近藤 誠准 教授
- 植物医科学
- 中島 千晴 教授、白水 貴准 教授
- 昆虫生態学
- 塚田 森生 教授
- 森林資源環境学講座
- 森林保全生態学
- 木佐貫 博光 教授、鳥丸 猛 准教授
- 森林微生物学
- 松田 陽介 教授、北上 雄大 助教

- 土壤圏生物機能学
- 水野隆文准教授
- 森林総合環境学
- 洲上佑樹准教授
- 緑環境計画学
- 松村直人教授、松尾奈緒子准教授
- 森林利用学
- 板谷明美准教授
- 木質資源工学
- 中井毅尚教授、内迫貴幸助教
- 木質分子素材制御学
- 野中寛教授、徳永有希助教
- 国際・地域資源学講座
- 循環経営社会学
- 野中章久教授
- 資源経済システム学
- 常清秀教授
- 国際資源植物学
- 関谷信人教授
- 国際資源利用学
- 吉原佑准教授
- 附属教育研究施設
- (紀伊・黒潮地域フィールドサイエンスセンター)
- 附帯施設農場
- (兼) 名田和義教授、奥田均教授、長菅輝義教授、三島隆准教授
- 附帯施設演習林
- (兼) 木佐貫博光教授、沼本晋也准教授、(兼) 洲上佑樹准教授
- 協力教員
- 先端科学研究支援センター
- 小林一成教授、土屋亨准教授、加賀谷安章准教授
- 連携大学院
- 木質資源工学
- (国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所木材加工・特性研究領域)

### 農業生物学講座

講座主任 松井宏樹

安部久教授、藤本清彦准教授、杉山真樹准教授、鳥羽景介准教授

○自然共生学

(国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所関西支所)

神崎菜摘教授

続きまして、本専攻講座および学科コースの近況について講座主任から紹介いただきます。

三翠同窓会会員の皆様におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。新型コロナウイルス感染症が5類感染症に引き下げられてから、1年が経ちました。大学には学生が戻ってきています。教室や生協に多くの学生がひしめき合っているのを見ると、以前のこと思い出すとともに、こんなにも学生がいたのかと少々戸惑っています。

ここでは、農業生物学講座についてご紹介したいと思います。

当講座の教育ユニットとしての名前は農業生物学コースです。ホームページに記されている当コースの教育理念を引用いたしますと、「農業活動による食料生産は人々の営みに必要不可欠です。安全でおいしい食品の供給・地球環境の保護・生物資源の循環においても農業は重要な役割を担っています。この活動を一層安定的かつ、効率的に行うため、対象とする生物の生命現象について深く理解することが必要です。本コースでは、農学の知識に加えて、生物学の基礎理論を学ぶことで、食料問題の解決や緑豊かな環境を維持するための方策及び技術を身につけることができます。」となっております。人類にとって必要不可欠な農

業、すなわち食料生産という営みについて深く学習することができるとコースであると自負しております。そのために、対象となる動植物の生命現象を明らかにし、深く理解することが学生に求められています。学生は作物・動物・微生物等の生命のしくみ、それらの生物を取り巻く環境との関係、そして生物多様性についての学問・実習を通して、食料・有用物質等の生物資源利用のあり方を学びます。

我々の講座では、遺伝育種学、作物学、園芸学、動物生産学、飼料学、植物医科学、昆虫生態学といった各教育研究分野と、紀伊黒潮地域フィールドサイエンスセンター附帯施設農場および先端科学研究支援センター植物機能ゲノミクス部門が一体となって教育・研究・管理・運営を行っております。次にこれらの教育・研究ユニットの研究内容についてご紹介いたします。

- 分子遺伝育種学
- 植物の育種にとって重要な生殖機構の研究を中心に、遺伝子・ゲノムレベルでの研究を行っています。
- 資源作物学研究室
- 三重県特産品のイセイモ、ダイズ、水稻などの新品種育成や生産技術の開発を通して地域の農業に貢献しています。
- 園芸植物機能学研究室
- 園芸植物がもつ有用な様々な機能を、果樹や野菜の栽培の改善に役立てるために研究を行っています。
- 動物生産学研究室
- 「動物のホルモン分泌」や「エサの消化に重要な微生物」についての調査、動物の生産性を高めるための研究を行っています。
- 草地・飼料生産学研究室
- 「飼料資源」を効率的に利用する為、乳牛や肉牛による栄養素の利用性について研究を行っています。

### 植物医科学研究室

野外調査、顕微鏡を使った形態学的方法、遺伝子解析等の分子生物学の方法を併用して研究を行っています。

### 昆虫生態学研究室

現在研究している主要な昆虫は、ハナバチ、ハナアブほかの作物の花粉媒介者、カメムシ類(侵入昆虫として、ただの虫として)です。

### 附帯施設農場

自然・生物エネルギーを利用した持続的な農業生産に関する多様な実習教育を行うと共に、教員・学生の研究の場として活用されています。

○植物機能ゲノミクス部門

当研究室では、世界で初めて開発したエッジエネティクスを利用する育種法を駆使して様々なストレス耐性作物の作出に取り組んでいます。

このように、生体レベルから分子レベルに至る非常に幅広い研究内容を網羅している講座でございます。

最後になりましたが、同窓会会員の皆様のみならずのご発展・ご健勝を祈念いたします。今後ともご支援のほどよろしくお願いたします。

### 森林資源環境学講座

講座主任 野中寛

森林資源環境学講座の最近の動向についてご紹介いたします。令和5年(2023年)3月末をもって、森林環境砂防学の大3教授が、信州大学に転出されました。令和6年(2024年)3月に、森林利用学の石川知明教授が定年退職され、4月1日に板谷明美准教授が教授に昇任されました。同じく4月1日に附帯施設演習林教員の洲上佑樹准教授が、森林総合環境学の准教授に配置換えになりました(演習林も兼

務)。森林総合環境学研究室には、平成24年(2012年)3月まで森林社会学がご専門の三井昭二先生がいらっしゃり(平成23年3月に定年、平成24年3月まで特任教授(継続雇用)、その後長らく教員不在でしたので、待望の研究室復活となります。湖上先生は、LCA (Life Cycle Assessment、ライフサイクルアセスメント)を専門とし、例えば、国産材で住宅を建てることで、どの程度の温室効果ガス(CO<sub>2</sub>など)が大気中に排出されるのか、などの解析をされています。湖上先生には、三井先生とは異なる「新しい森林総合環境学」を独自に構築していただければと思っております。なお現在、松村直人教授(緑環計画学)が大学院生物資源学研究科長・生物資源学部長を務められています(3年目)。また筆者も森林資源環境学講座の講座主任3年目です。

昨年までは、生物資源学部・資源循環学科に入学した学生が、2年生より農業生物教育コース、森林資源環境学教育コース、グローバル資源利用学教育コースのいずれかに分属され、森林コースに来る学生はおよそ30名でした。本年4月より生物資源学部は、これまでの4学科体制(資源循環学科、共生環境学科、生物圏生命化学科、海洋生物資源学)から、1学科(生物資源学)に改組され、学科には、生物資源総合学コース(定員30名)、森林環境科学コース(定員110名)、海洋生物資源学コース(定員45名)、生命化学コース(定員75名)の4コースが設置されました。森林環境科学コースは、2年生から農学専修(森林科学専修、農業工学専修(土木系、機械系))に分かれます。また、新しくできた生物資源総合学コースは、1年生の間に広く専門を学び、2年生にあがる際、他3コースのいずれかの専修に進むシステムとなっています。森林科学専修に来

る学生は、35名程度になると見込まれます。森林科学専修の学生は、森林科学の各研究室に配属され卒業研究を行います。土壌圏生物機能学研究室(水野隆文准教授)が生命化学コース所属になることもお知らせします。

近年は、企業による採用活動やインターンシップが活発で、学生の就職も早く決まる傾向にあります。三重県をはじめ各県の林業職員採用説明会もコロナ以前の水準に戻り非常に活発です。林野庁からも業務紹介や林業白書説明会をしていただいております。良い人材を確保すべく公務員試験の日程も前倒しとなっていますが、それでも民間の方が早く決まるため、学生にとっては悩ましいところでしょう。

1階事務室で森林講座の事務を担当されていた前田美代子様も本年3月に再雇用期間の満了を迎えられました。前田様は、2000年1月より船岡研究室にて長年勤務され、2016年4月より森林講座の面倒を見てくださいました。来々令和7年(2025年)3月には、緑環計画学の松村直人教授が、定年退職を迎える予定です。今後とも、同窓会の皆様からの変わらぬご支援ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

■ 国際・地域資源学講座

講座主任 関 谷 信 人

国際・地域資源学講座は、直近の人事異動により、自然科学系2分野と社会科学系1分野のみで構成される小規模なユニットに変貌してしまいました。

【自然科学系】

国際資源植物学(関谷信人教授)  
国際資源利用学(吉原佑准教授)

【社会科学系】  
資源経済システム学(常清秀教授)

小規模にはなりませんが、周辺講座の協力を仰ぎながら、教育の質を担保するために精進しております。同窓会の皆様には、当講座(コース)の教育・研究体制についてご理解いただき、今後ともより一層のご支援、ご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

共生環境学専攻

専攻長 渡 辺 晋 生

共生環境学専攻の最近の動向についてご紹介いたします。現在、本専攻を構成する教員数は23名であり、学部学生の教育・研究体制は、地球環境学教育コース、環境情報システム学教育コース、農業土木学教育コースの3つの教育コースで構成されています。また、博士前期課程の教育・研究体制は、地球環境学講座、環境情報システム学講座、農業土木学講座3つの講座で、博士後期課程の教育・研究体制は、気象・地球システム学講座、環境・生産科学講座の2つの講座で構成されています。この2年間でご退職された先生方、新たに赴任された先生方、あるいは各研究分野の様子については、各講座の紹介を参照ください。

新型コロナウイルスの流行と昨年5月からの5類移行を経て、本学科・専攻の学生たちの学びの環境や講義の進め方にも様々な変革がありました。オンライン授業はコロナ禍で急速に普及しましたが、ポストコロナの対面授業においても、その利便性と効果を生かした形式が定着しました。一方で、対面授業の重要性も再認識され、教員と学生、また学生同士の直接的なコミュニケーションが学びの深化に欠かせないことが再確認

されました。

コロナ禍を超えてなお、学部生、大学院生の就職状況は好調です。職種は従前からの公務員、技術職が主で、省庁、地方自治体、機械産業、情報産業等多くの分野にわたっています。公務員思考が高い学生も依然として多く、採用人数も増加しています。一方で、大学院進学率も維持しながら元氣な人材を輩出し続けております。

本学科・専攻では、近年では高度なDX人材を育成するためのプロジェクトや地域と協同して社会を活性化できる人材を育成するプロジェクトなども積極的に進めています。AIや各種デジタル機器を活用し、スマート農業や脱炭素の推進を迫られる社会において必ず活躍できる人材を育成していきます。同窓会の皆様には日頃よりいろいろのご支援、ご指導をいただき、心から感謝申し上げます。今後ともより一層のご支援、ご指導のほどよろしくお願い致します。

■ 地球環境学講座

講座主任 葛 葉 泰 久

地球環境学講座(旧自然環境システム学講座)の卒業生の皆様に、ご報告とお詫びがございします。講座という組織は、最近二十年では、教員が属す組織であり、大学院修士課程の学生にとつては、学生の属す組織とほぼ同じですが、学部の学生にとつては、同じような名前の教育コースやプログラムに属しているという感覚しかないでしょう。つまり、拙文で講座の報告をするということには多少違和感があり、本来、学部卒の卒業生の方には教育コースの報告をするのが筋ではないかと思っておりますが、以降、講座もコース等も同じようなものという感覚で書かせていただきます。

皆さんが卒業された、地球環境学講座・コースは、そもそも、地球科学の教育研究を行う組織として発足し、福山薫教授、サング・ンゴイ・カザディ教授、関根義彦教授を中心に、教育研究活動を行ってまいりました。いずれも理学部を卒業された立派な先生方です。最初の頃、水産等からやってくる、物理学のイロハも知らない学生に、物理学が必須である地球科学や防災学・自然災害科学の教育をするのに苦労された三人の先生方は、ニュートン力学をはじめ、物理学の基礎を学生に教え込むために、二年生の前期に週四コマの物理の授業を始められました。全部で六十四コマ分です。そのカリキュラムは時間とともに変わりましたが、今でも、立花義裕教授を中心に、多様な地球科学に関わる教育研究活動をやっていると自負しております。

教員組織 大学院修士の組織としての地球環境学講座は、まだありますし、この後どうなるという話は聞いておりませんが、学部学生を教育するコースに関し、上述の物理教育を重視した地球科学や、自然災害科学・防災学を教えるコースは、令和六年四月をもって、実質的になくなりました。これは、前研究科長の奥村克純先生が、一人で全責任を負いながら、主導的に進められた「学部改組」によるものです。学生人口が減り、定員減・予算減等の事情がある中で、研究科・学部をスリム化する必要があるのは衆目の一致するところでありました。そのような厳戒態勢の中で、全部の組織を等分に縮小するのではなく、異質なものをつぶして、いわゆる農学分野の生き残りを図られた、奥村先生の崇高な精神・ご判断、その実行力、「その講座を大事に大事にしている者達」からの怨嗟・恨恨を恐れぬ胆力に関しては、講座主任としてただただ尊敬し、平伏するものであります。奥村先生は、大学理事として、多くの後世に

残る業績を残されただけでなく、研究者としても、細胞のDNAを染める技術では、世界の第一人者と伺っております(DOJIBO, 10837/b, 200806098 など)。そういう管理運営・教育・研究すべてに卓越した能力をお持ちの方が主導された組織改編ですから、間違いがあるはずはございません。生物資源学研究科・学部が長く生きてゆくための最適解を探られたこと、お慶び申し上げます。なお、この改組につきましては、森林科学の大家であられるだけでなく、長く研究科の要職を務めてこられた松村直人現研究科長が、最後の一押しをされました。松村先生は、もともと自然環境システム学講座に長くおられ、講座で教授に昇進された方で、我々が同志・仲間と思っていた方です。卒業生の方も、今までそう思われていたでしょう。講座の教育・研究内容を熟知されており、講座・コースが挙げている最近の成果、広報活動も充分ご存じの研究科長に、最後の「押し」「解消させる」と明言されました)をされては、これも平伏するしかございません。

この一〇年以上、講座の主任を、立花義弘教授、松村直人教授、私・葛葉と三人が交代で務めてまいりました。卒業生の方におかれては、ご自分の卒業された組織が消えて無くなるということになってしまいません。現講座主任としては、その事情の一端を拙文でご説明し、その経緯をきっちりご記憶いただきたいと存じます。また、ことに対する責任を強く感じ、深くお詫び申し上げます。

以下、最近の教育研究分野と所属教員の動向についてご説明致します。

●フューチャー・アース学教育研究分野の飯島慈裕教授が東京都立大学に異動しました。

●環境解析学教育研究分野の大野研教授が、令和六年三月をもって定年退職され

ました。最後の方は、教養(共通教育)の部局長(研究科長と同格)を務められました。

●気象・気候ダイナミクス教育研究分野の立花義裕教授は、マスコミに出ずっぱりで多忙な日々を過ごしております。これほど研究科の広報活動に貢献した人は、過去いません。

●気象解析学教育研究分野の西井和晃准教授は、物理学の教育に大きく貢献するとともに、活発な研究活動を行っております。改組後のコースは、海洋系です。

●海洋気候学教育研究分野の山田二久次准教授は、講座中、ただ一人の卒業生として、教育研究だけでなく、同窓会活動を一人で背負ってくれています。改組後のコースは、海洋系です。

●未来海洋予測学教育研究分野の万田敦昌准教授は、九州地方の豪雨や、大気海洋相互作用、極端気象に関する研究で顕著な成果を上げています。改組後のコースは、海洋系です。

●地球システム進化学教育研究分野の坂本竜彦教授は、相変わらず多彩な分野の教育研究活動を行っております。研究室は毎日賑やかで、学生は楽しそうです。改組後のコースは、農業工学系です。

●水環境・自然災害科学教育研究分野。私・葛葉は令和八年には定年退職を致しますので、改組後の担当コースはありません。

## 環境情報システム工学講座

講座主任 森尾 吉成

三翠同窓会公員の皆様におかれましては、日頃より当講座の教育研究活動へのご理解とご協力を賜り、また、卒業生を温かく迎えていただき、心より感謝しております。

現在の研究室(教育研究分野)の体制は、

この後に示すように、4つの教育研究分野と7名の教員で構成されています。当講座の体制は、この4年間で大きく変化し、令和5年3月に村上克介教授が退職されたのに伴い、現在、生物環境制御学教育研究分野に所属する学生がおらず、卒業生にとっては少し寂しい状態となっています。昨年の令和5年4月には、新しく鈴木哲仁准教授が赴任され、生産環境システム学教育研究分野は2名体制に戻り、若い力でにぎやかにになりましたが、翌年の令和6年3月に陳山 鵬教授が退職され1名体制になっています。令和5年12月には、新しく呉 婷 婷助教が赴任され、エネルギー利用工学教育研究分野は2名体制となりました。教員数は少なくなりましたが、新たな若手教員が2名加わり、教員全員が教育と研究に一生懸命取り組んでいますので、我々の情熱は学生に伝わり、教員学生ともども縦と横のつながりを大切にしたい、大変よい雰囲気は保たれております。就職につきましては、これまで同様、非常に良い状況が続いておりますが、入学する学生の様子が大きく変わっていることから、在学中に学生の「現場力」を少しでも向上させられるように、カリキュラムや授業課題を改善することを忘れず、学生には愛情いっぱいの声掛けを行っていきたくと考えております。今後とも、同窓生の皆様からの変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

それでは、当講座の4つの教育研究分野の紹介をさせていただきます。

○応用環境情報学

(福島崇志教授、滝沢憲治助教) 工学的手法を用いたスマート農業の実現およびバイオマス利用に資することを目的とする。農用車両の最適制御や走行性、センサ開発を含む農業情報システム、収穫後

の生産物の流通システム等食料生産に関連する教育研究、および半炭化やバイオディーゼル等バイオマスエネルギーに関する教育研究を行っています。

○生産環境システム学 (鈴木哲仁准教授)  
食料や食品の生産・加工・流通の工程において、センシング工学、情報工学、機械工学等を駆使して新しいシステムを創成することにより、農産物・畜産・水産物の品質・生育の情報化、生産管理のスマート化、食料生産の安全・安心ならびに高付加価値・低環境負荷の実現を目指した分野です。環境にやさしく安全・安心な機械・設備システムの設計と状態監視・診断および知能ロボットシステム、光や音を用いた食料・食品の非破壊診断システム等に関する教育と基礎・応用研究を行っています。

○エネルギー利用工学  
(王 秀崙教授、呉 婷婷助教)  
再生可能な生物資源の利活用と低環境負荷型食料生産システムの自動化および効率化を目的とする。植物バイオマスを利用した生分解可能なバイオマス素材の開発、オフロード車両の走行性向上と食料生産システムの自動化およびエネルギー有効利用のための農業機械の最適化に関する理論と技術について教育・研究を行っています。

○フードシステム学  
(森尾吉成教授、内藤啓貴助教)  
食料の生産から、収穫、加工、パッケージング、輸送、流通、消費、廃棄へと繋がるフードシステムを対象とし、持続可能なフードシステム、フードシステムのスマート化、ロボット開発、農林水産物・食品の品質の情報化ならびに情報の取り扱い手法に関する教育と基礎・応用研究を行っています。

最後に、昨年末になりますが、当講座の基盤づくりおよび発展に大変尽力されました。

た市川眞祐先生が、令和5年11月20日に84歳でご逝去されました。眼鏡をかけた先生の鋭い眼光と突き放す言い方の裏に愛情があふれていた姿を忘れることはできません。卒業生とともに心よりご冥福をお祈り申し上げます。

▼自己紹介・鈴木哲仁先生……………

二〇二三年四月一日より共生環境学科生産環境システム学研究室に准教授として着任しました鈴木哲仁と申します。名古屋生まれ奈良育ちで長く隣りの県にいたことに加え、学会では前々から同じ支部として三重の先生方にも大変お世話になっていたこともあり、三重に着任したことに深い縁を感じている次第です。二〇一三年五月より京都大学大学院農学研究科に助教として採用されて以来、光を主とした農・畜・水産物のセンシング技術とデータ解析に基づき、世界の食を支える生産・管理技術の構築を目指し、教育研究活動を行っています。

日本では人口減少が叫ばれる一方、世界人口の急増とそれを支えるための食料の供給力向上が課題となっております。そのような中、我が国では農業機械メーカーに限らず多くの企業による農畜水産業への参入が目立ち、「スマート農業」「精密農業」等の言葉が広く認知されるほど、生産力向上のための先進技術が実用化されつつあります。また、生産から流通におけるロスを減らすことや、動物の身体的及び心的状態を指すアニマルウェルフェア(動物福祉)を向上させることも求められており、多面的な視点から「持続可能」な食料生産システムの実現が叫ばれています。これら未来の食料生産を実現するための核となるセンシング技術を目指し、光を用いた農・畜・水産物の計測・診断技術に関する教育研究活動に邁進しております。具体的には現在

茶の品質評価、肥育牛の血中ビタミンA診断、孵卵工程の胚成長診断、水産物の鮮度・寄生虫診断などに取り組んでいるところであります。これらの各種技術が将来、三重県が擁する多種多様な農畜水産業の地域課題の解決と、世界への飛躍に少しでも貢献できるよう、研究を推進してまいります。

所属する生産環境システム学研究室では、二〇二二年三月に山下光司先生が、二〇二四年三月に陳山鵬先生が定年退職され、本年より私が研究室代表として学生指導に当たっております。未熟な点が多々あるかと思いますが、三重大学の農業機械工学分野で先人が築いてこられた長年の歴史を継承しつつ、さらに発展させられるよう研究・教育に精進してまいりますので、引き続きご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

▼自己紹介・呉 婷婷先生……………  
三重同窓会の皆様へ、新たな春の訪れと共に、三重大学へと新たな風をもたらしたく、心よりご挨拶申し上げます。

私の名前は呉 婷婷(ウーティンティン)です。四川省の生まれで、地域特有の辛さと同じくらいの情熱を胸に、2010年に新しい世界を求めて日本にまいりました。ここでは交換留学生として、学びの旅の新たな一歩となりました。

三重大学での研究生活は、生物資源学研究室で始まり、共生環境学学科で博士号を取得するまで、自然と科学の調和を探求しました。2015年には、同大学の地域イノベーション学研究室でポストドクターとして、さらに研鑽を積む機会を得ました。

その後、実社会への一歩として、浅井農園株式会社就職し、研究から現場へ、そして開発へと視野を拡大し、ミニトマトの養液栽培や温室内複合環境制御の研究に注力しました。農水省のPJ「atomato」コ

ンソーシヤムでは、植物光合成のリアルタイム測定システムを農業に応用することで、国際的な研究経験を積みました。いなべ市にあるアグリッド株式会社では、最先端の農業技術を駆使した自動収穫ロボットや自動運搬システムの開発に携わり、IoT技術の新境地を開拓することに貢献しました。

私の探究は続いています。トヨタ明知工場でのトマト栽培のコンサルタント、そして日本国内の合計8ヘクタールに及ぶ温室栽培のアドバイザーとして、新たな挑戦を常に求め続けています。

私たちの学問は、理論にとどまらず、地域社会との協力、環境への尊重、そして何より持続可能な未来への貢献に重きを置いています。今後も三重大学の一員として、これらの責務を深く自覚し、私の国際的な経験と情熱を教育と学びの場にもたらすことを喜びに感じています。

この会報を通じて、皆様と知識を分かち合い、共に成長していくことを楽しみにしております。これからも、私たちの三翠の枝葉がより一層茂り、豊かな実を結ぶよう、精一杯努力してまいります。

■農業土木学講座

講座主任 保世院 座狩屋

農業土木学講座の進捗状況と将来の展望についてお知らせします。令和5年度に土資源工学教育研究分野の酒井俊典教授が退職され、三重大学理事・副学長に任命されました。土資源工学教育研究分野での業績に心から感謝申し上げます。そして、令和5年2月に藤山宗准教授が三重大学みえの未来創機構に赴任され、協力教員として当コースの卒業生の指導に尽力頂いています。また、令和6年4月に長岡誠也助教(水利施設工学教育研究分野)が着任

され、現在6教育研究分野11教員の体制で教育研究活動を行っています(2024年4月1日現在)。加えて、講座教員や学生、関係者の皆様の協力のもと、JABEE(日本技術者教育認定機構)の認定プログラム「農業土木学プログラム」を6年間にわたって継続することが認定されました。農業土木学講座の輝かしい未来を目指し、今後も講座の教育・研究の質の向上に努め、学生の育成に尽力してまいります。

#### ○農村計画学

(森本英嗣 准教授)

主な研究テーマは、地域開発計画、土地利用計画、農村インフラの整備と管理、地域コミュニティの支援と活性化、環境保全と持続可能な開発、国際協力と農村開発などです。最近の話題としては、ドローンを使った測量学実習が三重大Lectureナビで紹介されたことなどがあります。

#### ○水資源工学

(近藤雅秋 准教授、伊藤良栄 助教)

主な研究項目は、水資源管理と利用、洪水予測と防災対策、流域管理と緑のインフラ、水質管理と浄化技術、地下水の管理と保全、水資源と気候変動などです。最近の話題としては、2023年度農業農村工学会大会講演会にて、平成31年卒業の山中理奈さん(独立行政法人水資源機構 担当教員・伊藤良栄助教)が農業農村工学会誌「水土の知」第89巻第12号に掲載された『利根大堰における河川内仮締切り工事』で優秀技術リポート賞を受賞したことなどがあります。

#### ○水利施設工学

(岡島賢治 教授、長岡誠也 助教)

実情に合わせて研究室の名前を変更しました。また、メンバーに長岡誠也

助教が加わりました。主な研究テーマは、水路の機能評価、水路の漏水検出技術、水路の水質評価、水路の流量特性解析、水路の維持管理システム、水路の改修・補強技術などです。最近の話題としては、2024年1月にインフラメンテナンス大賞(農林水産大臣賞)の受賞、2023年10月に中日新聞にて取組むスマート農業実証実験プロジェクトについて掲載されたことなどがあります。

#### ○土壌工学

(保世院座狩屋 教授、田中宣多 助教)

「国際環境保全学」と「土壌工学」を統合し、新たに「土壌工学研究室」として再出発いたしました。メンバー2名の研究室になりました。主な研究テーマは、地盤改良技術の開発、地盤調査と評価、廃棄物の再利用と処理技術、地盤保護と環境保全、地域資源の最適活用、地盤改良と廃棄物利用の研究、留学生の育成とリーダーシップの養成、地盤と植生の相互作用などです。最近の話題としては、2022年10月に、田中宣多助教のFD講演会がZOOM配信にて開催されたことなどがあります。

#### ○土壌圏循環学

(取出伸夫 教授・坂井 勝准 教授)

主な研究テーマは、畑地の蒸発散に注目した土壌中の物質・熱移動のモニタリングおよび予測モデルの構築、土壌に投入された有機物の無機化や、植物による吸水と栄養成分の吸収に注目した予測モデルの構築などです。最近の話題としては、2021年6月に取出伸夫教授が、日本地下水学会にて地下水学術賞を受賞しました。

#### ○土壌圏システム学

(渡邊晋生 教授)

主な研究テーマは、水田や圃場の物理化学性の評価や温暖化に対する土壌有機物の保全など持続可能な農業システムの構築を目指した研究と、土の凍結・凍上メカニズムの解明や土の凍結現象の地盤凍結工法や岩窟遺跡の保全などへの利活用に関する研究です。最近の話題としては、2024年3月に博士前期課程2年の鈴木健大さんが令和5年度土木学会中部支部長賞を受賞したことなどがあります。

#### ▼自己紹介・長岡誠也先生……

2024年4月1日より農業土木学講座の水利施設工学研究室に助教として着任しました長岡誠也と申します。出身は愛知県名古屋市中区で、学部から学位取得まで9年間を三重大学で過ごしました。三重大学のオープンキャンパスで農業土木や農業機械を知り、ただ漠然と夢も希望もない理系高校生として過ごしていた私が「農業工学の持つ懐、多面性」に衝撃を感じ、入学を決めました。その後、講座の先生方から、農業土木学の歴史や今抱えている課題を幅広く学び、博士後期課程の頃には研究者としての「一使命感」を感じるようになりました。学位取得後は、建設コンサルタントの設計部署に4年間勤め、機能保全計画・管路耐震対策・河川構造物の改修等の実務を経験し、技術者としての「一面」があります。

さて、私の研究テーマは、「持続可能な農業水利施設」です。我が国の農業政策の一番根底には食料自給率の向上があるが、担い手や技術者の減少、そして水利施設の高齢化といったネガティブな要因を抱えながらの取組みとなっているのが現状です。そこで鍵となるのが「技術力の底上げ」であると考えています。その一助として、学位論文では「超音波による農業用開水路の

粗度係数計測手法の開発」として、従来では流量観測をしなければ求められなかった粗度係数を、センシング技術で簡易的に求めることを可能にしました。超音波がコンクリート壁面で反射するときの散乱と摩耗量(凹凸)の相関を明らかにするため、様々な環境下で実験を繰り返した成果になります。今後は、CN(カーボンニュートラル)に関する研究テーマにも取り組んでいければと考えています。セメント生産におけるCO<sub>2</sub>排出量は、我が国のCO<sub>2</sub>総排出量の4・5%を占めており、コンクリート材料を扱う者として無視できない問題です。多様な視点を持ち多方面からのアプローチで、1歩ずつ研究生活を歩んでいこうと思っています。

最後になりましたが、母校であるこの三重大学で教員として勤めることが出来るのは、これまでお世話になりました、全ての方々のおかげであると感じております。これまでの感謝の気持ちを大切にして、本学及び農業土木学分野の更なる発展と繁栄に貢献できるように努めてまいります。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

## 生物圏生命科学専攻

専攻長 苅田 修 一

生物圏生命科学専攻(大学院)の近況についてご報告申し上げます。学部につきましては、現状二年生から上の学年は、旧学科体制になっており、一年生は、新学科体制になっており、学年進行により大学院も改組が行われるとは思っています。現在の本専攻では、博士前期課程においては、生命機能化学講座、海洋生命分子化学講座、海洋生物学講座の3つの講座から、博士後期課程については、応用生命化学講座と海洋生

物科学講座の 2 つの講座から構成されています。本専攻では、現在、博士前期課程の学生が 129 名、博士後期課程の学生 13 名が在籍しており、47 名の教員で教育及び研究指導を行っています。

令和五年五月からの新型コロナウイルスの五類移行を受けて、大学における授業、実習等は以前の状況に戻り、活発な研究活動や教育が再び再開いたしております。詳細につきましては、各講座の説明を参照いただければと思います。

本専攻として、令和五年度に海洋生物学講座に新たに鯨類学教育研究分野が設置され、現在、森阪匡通教授、船坂徳子准教授、八木原風助教授が同分野にて活動をしております。

本専攻に関係するこの二年間の人事異動等についてご報告いたします。新規採用教員として、令和五年四月に水谷雪乃助教が、生体高分子化学教育研究分野に、令和六年一月に北村真一准教授が先端養殖管理学教育研究分野に、令和六年四月に八木原風助教授が、鯨類学教育研究分野に着任いたしました。

また、令和五年度において、森阪匡通教授、竹林慎一郎教授、倉島彰教授、船坂徳子准教授、國武絵美准教授、中村亨准教授が、それぞれ昇格致しております。一方、令和六年三月をもって、古丸明教授、神原淳教授、原田泰志教授、青木恭彦教授、田丸浩教授、田口和典助教、前川陽一船長が退職されました。また青木恭彦教授の退職に伴い、福岡智司教授が、水産品質学教育研究分野教授に異動いたしました。前川陽一船長の退職に伴い、令和六年四月、中村亨准教授が船長に、奥村順哉助教が一等航海士として着任しました。本学地域イノベーション研究科に異動しております。末原憲一郎教授が、生物資源学研究科に異動になり分子生物情報学教育研究分野教授

に着任しました。

大学の管理運営では、本専攻の橋本篤教授が、教育研究評議会委員として、船原大輔教授が、研究担当の学長補佐として、大井淳史教授が、教育担当の学長補佐として、三重大学の管理・運営において重責を担っていただいております。また、吉岡基教授は、理事として大学執行部で活躍されております。研究科執行部においては、木村哲哉教授、柿沼誠教授が、副研究科長として、研究科全体の管理・運営に貢献されております。

続いて、本専攻を構成する生命機能化学講座、海洋生命分子学講座、海洋生物学講座の詳細と近況について各講座主任より紹介いただきます。

### 生命機能化学講座

講座主任 末原 憲一郎

令和 6 年度、生命機能化学講座の講座主任を仰せつかりました末原です。どうぞよろしくお願い申し上げます。本講座は、旧農学部時代の農芸化学の流れを汲んでおりますが、時代に合わせて教育研究分野名の変更や新設がなされ、現在に至っております。実験実習を重視した教育を展開しており、2 年次に化学実験と実験実習 1 と 2 を、3 年次には実験実習 3 と 5 (以上必修) と 6 (選択科目ですが食品加工実習や工場見学・実習などを扱うため多くの講座学生が受講) を行っております。教員はここ数年のコロナ禍で培ったオンライン授業の経験を活用して実験操作を動画にして予習復習に活用する、また学生は授業・研究室活動、ひいては就職活動に至るまでオンライン化が日常化するなど、教員・学生ともに教育研究ははじめ様々な場面で ICT 活用能力が向上したように思います。一方で、対面によるコミュニケーションの機会が数年にわ

たつて失われた影響は大きいと思われるます。昨年度は 3 年ぶりの縦コン (研究室分属を控えた 3 年生と 4 年生以上の研究室学生・教員が交流する) や卒論・修論発表会などの集会 (お疲れ様会) を開催することができましたが、積極的に参加しようとする学生の減少が目立ちました。昨年度卒業した学部 4 年生は、大学入学時からコロナ禍で過ごしてきており、「お疲れ様会は研究室でやったので、講座のほうは出席しなくてもよい」と考えた人が一部 (多く、かもしれません) いました。私は某部活動の顧問教員をしておりますが、集団の中、とくに様々な年代の方が集まる中で「どう連絡・行動してよいかわからない」などと主将が言う (よくよく聞きだしてみると、なのですが) など、コミュニケーションの機会を活かすことが下手 (あるいは取り方がわからなくて動けない) ように感じる、それがあらゆる場面で感じられます。このあたりをどう立て直すかが今後の課題であると思っております。

現在の講座は、以下の 11 教育研究分野 16 名の教員で構成されております。前号からの講座人事の進展としては、竹林先生が教授に、國武先生が准教授に昇進されました。また、私事で恐縮ですが、平成 30 年〜令和 5 年度まで大学院地域イノベーション学研究所に転籍 (ただし、学部は生物資源に所属、食品生物情報工学教育研究分野) していた末原が生物資源学研究科に戻り、分子生物情報学教育研究分野 (活動拠点は元のまま) に異動しております。以下に教育研究分野と所属教員を紹介いたします。

○分子細胞生物学

○分子生物情報学

○生理活性化学

末原憲一郎 教授、三宅英雄 准教授

○創薬化学

増田裕一 准教授

○創薬化学  
増田裕一 准教授

○生物機能化学  
勝崎裕隆 准教授、岡咲洋三 准教授

○生物制御生化学  
寺西克倫 教授

○食品生物情報工学  
橋本 篤 教授

○食品化学  
磯野直人 准教授

○微生物遺伝学  
木村哲哉 教授、國武絵美 准教授

○栄養化学  
西尾昌洋 准教授、栗谷健志 助教

○食品発酵学  
苺田修一 教授、梅川碧里 准教授

これに加えて連携大学院として、  
○食品機能化学  
(太陽化学(株)連携大学院)

小関 誠 教授、石原則幸 教授、小林純也 准教授

令和 6 年度の本講座における学生数は、4 年生 50 名、大学院生 57 名 (M1 が 28 名、M2 が 29 名) と、かつてないほどの大所帯となっております。大学院生の研究活動も活発になり、また、多くの企業からお声がけをいただき、就職状況も比較的順調であります。これも先輩諸氏のご活躍のおかげだと感謝しております。本講座では、研究室への 3 年生の配属は、例年 10 月からとなっており、現在 3 年生が 48 名在籍しておりますので、大学院生、4 年生、3 年生を合計すると 150 名を超える学生が秋から研究室で活動をはじめるとい状況になっております。今後、コロナ禍で中止しておりました講座のスポーツ大会などの行事や学生主体で企画運営する卒業・修了記念

パーティーなど、縦のつながりを意識した行事を再開していきたいと考えております。講座全体として、今後も、しっかりとした教育、研究に取り組むと共に、社会で活躍できる人材の育成につとめてまいります。後輩を見かけました時には、お声がけをいただければと思います。

最後に同窓会の先輩の皆様におかれましては、引き続き変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

### 海洋生命分子化学講座

講座主任 船原 大輔

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、日頃より当講座の教育研究活動へのご理解とご協力を賜り心より感謝申し上げます。

生物資源学部は令和6年4月より1学科4コース制に改組され、当講座は生命化学コース海洋生命化学専修の教育を主に担当することになりました。教育内容はこれまでの生物圏生命化学科海洋生命分子化学教育コースとほぼ同様ではあるものの、新しい時代に向けてより充実した内容になりました。第1期生となる新入生は女子比率が約7割に達し、これは他コースに比べても突出した数字です。多様化した時代に活躍できる優秀な人材を育成していく所存です。

当講座での前号からの変化を報告いたします。令和5年4月から水谷雪乃先生が生体高分子化学教育研究分野に助教として着任されました。水谷先生は本学部を卒業後、本学大学院に進学、令和2年3月に博士号を取得されました。その後、佐賀大学での研究員などを経て、母校である本学へ戻ってこられました。本講座では初の女性教員であり、将来が大変楽しみです。今後ますますご活躍されることと思います。令和6年3月には、田丸浩先生(水圏生物利用学教育研究分野教授)と青木恭彦先生(水産

物品質学教育研究分野教授)の2名が退職されました。田丸先生は東北大学へ転出されました。田丸先生は平成12年に着任されて以来、23年間にわたり熱心に教育研究に取り組みされてきました。本講座としては大変な痛手ではありますが、新天地でのますますのご活躍を期待しています。青木先生は定年まで2年を残して早期退職されました。青木先生は平成元年に着任して以来、途中、地域イノベーション学研究所へ所属されていた期間も含めて、35年間の長きにわたり教育研究に尽力されました。本学部への教育に心より感謝いたします。また、青木先生の後任として福岡智司先生が海洋微生物学教育研究分野から水産物品質学教育研究分野に異動されました。

現在8つの教育研究分野で10名の教員が海洋生物資源の有効利用を目指して、海洋生物機能の化学的解明と、それに必要な学理と技術の教育研究に取り組んでいます。令和6年度の当講座の教育研究分野の構成は次の通りです。

- 海洋生物化学 柿沼 誠 教授、五十嵐洋治 助教
- 水圏生物利用学 青木 恭彦 教授、五十嵐洋治 助教
- 水圏材料分子化学 伊藤智広 准教授
- 生物物性学 大井淳史 教授
- 生体高分子化学 船原大輔 教授、水谷雪乃 助教
- 海洋微生物学 田中礼士 准教授
- 水産物品質学 福岡智司 教授、岡崎文美 准教授
- 海洋食糧化学 柴田敏行 准教授

当講座の近況についてご報告します。研

究に関しては運営費交付金削減などで相変わらず研究環境は厳しいままですが、科学研究費補助金の獲得、民間企業や公共団体との共同・受託研究を推し進め、研究活動の維持と社会貢献に努めています。研究成果は日本水産学会、日本農芸化学会、日本生化学会、日本生物工学会、マリンバイオテクノロジ学会などの学会活動、学外イベントやメディアで発信しています。

講座を取り巻く状況はコロナ前にほぼ戻りましたが、コロナ禍のなかでデジタルツールの活用が進み、以前よりも多様な働き方や研究手法が取り入れられるようになりました。時代の先をいく、未来を見据えた教育研究がより効果的に実施できるようになりました。

当講座は、旧水産食糧学コースを起源とし、途中、旧海洋生物科学講座や旧水圏生物生産学講座に分かれていた時期を経て、再び一体となった旧マリンバイオテクノロジ学講座が名称変更して海洋生命分子化学講座になり、現在に至っています。その間、様々な背景を持つ多様な教員で構成されるようになりました。学生も様変わりし、先に述べたように昔では考えられないくらい女子学生が多く在籍しています。男子学生も女子学生もやる気や能力に差はありませんが、男性教員からすれば、気を使う場面が多くなってきました。そのあたりのフォローを水谷先生に期待するところです。今どきの学生の気風に合わせた指導をするように常に心がけるようにしています。

卒業生の進路についてですが、大学院修士と学部卒業生ともに就職志望者のほぼ100%が就職しています。就職先は多岐にわたりますが、食品、化学、医薬、化粧品、農林水産業・関連団体などの業界への就職が比較的多いようです。近年減少していた大学院進学者数も以前の水準に戻り、約3割の学生が大学院に進学しています。女子

学生の大学院進学者が増加しているのが近年の特徴です。社会では大学院卒の人材の重要性が高まっており、就職状況も良好です。大学院でより高度な教育を受けることで、社会で活躍する可能性が広がると思いますので、多くの学生が大学院で学ぶことを望みます。

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、

これからも引き続き変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

### 自己紹介・水谷雪乃先生……………

二〇二三年四月一日より海洋生命分子化学講座、生体高分子化学研究室に助教として着任いたしました。水谷雪乃と申します。出身は三重県いなべ市で、三重県生まれ三重県育ちの生粋の三重県人でございます。博士号も三重大学で取得いたしました。大

学生の時は、現在所属している研究室の隣の海洋微生物学研究室に所属しておりましたが、博士号取得後約三年間佐賀大学で修行を積んだのち、少し横の研究室にずれ

て三重大学に帰ってまいりました。学位取得までは二枚貝や巻貝に共生する「貝類にとつて有益な働きをする新しい細菌」を探すために、細菌の単離や分類、またはDNA等の分子を対象とした検出などを行っていました。実験の成功を左右する一つの大きな要因として、どれだけ多くのサンプルを用意できるかが挙げられますが、三重大学は全国的に見ても珍しい海に近接した大学なので、夏はよくスコップやバケツ、長靴を持って海にサンプル採取に行っていました。その甲斐もあってか、新規細菌の単離に成功したりと充実した学生生活および研究生生活を送ることができたと思います。

二〇二〇年に博士号を取得した後は、佐賀大学でポスドクとして雇用していただくことになりました。ちょうどコロナ禍の時

期だったので、人気のない駅を大きなキャリーケースを転がしながら新天地へと赴きました。佐賀大学では研究対象を二枚貝から海苔へと変え、「海苔の生育に有益な働きをする新しい細菌」を探索していました。研究を通して細菌だけでなく、「海苔の生育に良い影響を与えるかもしれないウイルス」も存在することが明らかとなり、現在の研究にもつながる新たなウイルス研究の基盤になりました。

現在は三重大学に戻ってまいりましたが、異なる環境で過ごした経験を活かし、これまでに培った細菌の知見と、佐賀で開始したウイルス研究を大切にしながら、新たな研究も推進していく所存です。皆様には学生時代から大変お世話になっておりますが、これからは教員として恩返しをさせていただきます。まだまだ教示を仰ぎたいと存じます。未熟な点は多々あるかと存じますが、何とぞご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

■海洋生物学講座

講座主任 (兼・海洋生物資源学部長) 筒井直昭

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のことと存じます。日頃より当講座・学科の教育研究活動へのご理解とご協力を賜り、改めて感謝申し上げます。

さて、前前号 (15号) にて皆様に着任のご挨拶をいたしました頃はコロナ禍の真っ只中であり、校舎内にも構内にも人がまばらにしかいないという異常な状況でした。それから 4 年、全く制限無く諸々の活動を開始できる 4 月を久しぶりに迎えられることに講座教員一同喜びを感じ、心持ちを新たに教育や研究に取り組んでおります。

講座の教員異動についてご報告いたします。令和 5 年 3 月末に魚類増殖学教育研究

分野の吉岡基教授が、理事への転出に伴いご退職されました。翌令和 6 年の 3 月末には水族生物学教育研究分野の神原淳教授、水圏資源生物学教育研究分野の古丸明教授、海洋個体群動態学の原田泰志教授、および生物海洋学の田口和典助教が定年退職されました。吉岡先生は研究科長を務められたほか、研究科附属鯨類研究センターを設立して初代センター長を務めるなど多くの功績を残されました。現在も理事・副学

長として三重大学の管理や運営に深く関わっていただいております。神原先生は評議員として大学運営に携わられたほか、水産実験所の鳥羽への移転、伊勢志摩海洋教育研究アライアンスの構築などにもご尽力されました。これは多くの職場に是非なく訪れる出来事でありまして、長年に渡り本講座・学科の屋台骨を支えてきてくださった先生方が軒並み教壇と研究室を去られるという事実にいざ直面すると、そこはかとなく不安を感じることもあります。先生方のこれまでの丹精に改めて感謝申し上げます。

こうした異動が多ければ新たな動向もまた多くなります。まず、鯨類研究センターの全学組織化 (三重大学研究基盤推進機構への移行) にあたり、センター構成教員の研究科内での基盤を強固にすると共に、関係する学生の活動環境をより充実させることを目的として、令和 5 年 10 月に鯨類学教育研究分野を新設しました。センター構成員による海生哺乳類の研究体制はわが国で類を見ないものであり、当該分野の設立は大学および大学院進学者に対する当学科 (コース)・講座の訴求力を一層高めるものと考えております。センター所属で、魚類増殖学教育研究分野の教員も兼務していた森阪匡通准教授は令和 5 年 4 月に教授に昇進され、同年 10 月に当該分野の教授に配置替えとなりました。船坂徳子准教授も

同様に配置替えとなりました。さらに、前号 (16号) でもお伝えした通り、三重大学では令和 3 年度から「博士課程学生支援プロジェクト」が始まっています。この制度に基づき、令和 6 年 3 月に本学で博士の学位を取得した八木原風氏が、翌 4 月から 3 年間を任期とした育成助教としてこの鯨類学教育研究分野に加わりました。また、令和 6 年 1 月に北村真一先生が先端養殖管理学教育研究分野の准教授として着任されました。ご専門は魚介類の原虫病やウイルス病であり、病因の特定からその防除方法の開発まで様々な研究を展開されています。

先生は韓国で教鞭を取ったご経験もあり、研究科の国際交流活動にも大きな力となります。令和 6 年 3 月には、藻類学教育研究分野の倉島彰准教授が教授に昇進されました。引き続き、三重の豊かな海の恵みの基盤をなす藻場の維持や再生を見据えた多面的な調査研究を力強く推進していただきませう。加えて、連携大学院の国立研究開発法人水産研究・教育機構水産技術研究所での人事異動に伴い、正岡哲治氏と岡本裕之氏の後任として、松本才絵氏と藤原篤志氏が連携教授に就任されました。当学科の教育研究に深く関わる練習船勢水丸でも新たな動向がございますが、詳細は後段にある船長からの報告をご覧ください。以上のように陣容を構築しつつある中、令和 6 年 4 月現在の講座教員の構成は次の通りとなっております。

- 生物海洋学 石川 輝教授
- 水族生物学 宮崎 多恵子准教授
- 藻類学 倉島 彰教授
- 浅海増殖学 筒井 直昭教授

- 先端養殖管理学 一色 正教授、北村 真一准教授
- 魚類増殖学 淀 太我准教授
- 海洋生態学 木村 妙子教授
- 水圏資源生物学 伯耆 匠二助教
- 水圏分子生態学 河村 功一教授
- 海洋個体群動態学 金岩 稔准教授
- 応用行動学 森川 由隆准教授
- 鯨類学 森阪 匡通教授、船坂 徳子准教授
- 八木 原風助教
- 附帯施設水産実験所 松田 浩一教授 (浅海増殖学)
- 岡辺 拓巳准教授 (水産応用情報学)
- 山本 康介助教 (浅海増殖学)
- 附属練習船勢水丸 中村 亨准教授 (船長)
- 奥村 順哉助教 (一等航海士)
- 発生・代謝機能解析学 (連携大学院) 松本 才絵連携教授、藤原 篤志連携教授、村下 幸司連携准教授

教育面においては、2 年間で 79 名の修士、40 名の修士 (うち留学生 3 名)、6 名の博士 (うち留学生 2 名) を送り出すことができました。コロナ禍の最も苛烈な時期に学修や研究など研鑽を積んできた世代です。その逞しさとしなやかさでもって、今後も様々に活躍してくれるでしょう。令和 6 年 4 月時点で研究室に配属されている学生数は、4 年生が 44 名、博士前期課程と後期課程の大学院生がそれぞれ 52 名と 7 名です。大学院への進学者が多いことは講座として好ましいですが、スペースの確保などで悩

むことも多いです。

最後に研究についてです。人材面は右記のような学生数にも支えられています。資金面は運営費交付金の削減の継続などで厳しい状況が続いています。そうした中でも教員一同、科学研究費補助金の獲得の他、省庁によるプロジェクト研究への参画、公設機関や民間企業との共同研究ならびに受託研究などを通じて活発に研究を行い、成果の発信に努めております。その中で、山本先生が生命機能科学講座や海洋生命科学分子科学講座の先生方と共に令和4年度の三重大学賞(環境SDGs分野)を受賞されました。さらに古丸先生と金岩先生が令和4年度の、石川先生が令和5年度の三重大学優秀論文賞を受賞されました。

以上、簡単ではございますが、海洋生物学講座と海洋生物資源学部の近況をお伝えいたしました。三翠同窓会会員の皆様には、今後とも力強いご支援やご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

#### ▼自己紹介・北村真一先生……………

2024年1月1日より生物資源学研究所海洋生物学講座先端養殖管理学研究室に准教授として赴任しました北村真一と申します。前職は愛媛大学沿岸環境科学研究センター生態系解析部門で、約17年勤務致しました。専門は魚病学で、養殖場や水族館で発生する感染症を制御することを最終目標にしています。馴染みがない方もいらっしゃると思いますが、読者の方が食されている養殖魚介類には多様な感染症があり、どの養殖場もほぼ毎年のように、魚病に悩まされています。我が国はブリ、マダイ、ヒラメのような代表的な養殖魚種以外にも多種多様な魚類が養殖されているため、それぞれの魚類に対して感染症対策を行う必要があります。いくつかの感染症に対してはワクチンが開発、製品化され、魚

病被害の軽減に貢献していますが、しばしばワクチンが効かない新たな血清型の病原

体が発現することや、そもそもワクチン開発が困難である感染症もあります。三重県はアコヤガイやマガキなどの貝類、ノリ類などの藻類が主要な養殖漁業ですが、マダイやブリなどの魚類養殖も盛んです。三重大学ではどのような研究を展開するか考えましたが、細菌性疫病でマダイ養殖において魚病被害の約50%を占めるマダイのエドワジエラ症の対策にチャレンジしようと思えます。原因細菌が細胞内(白血球内)に寄生するため、ワクチンを接種しても抗体がアクセスできないため、一般的な不活化ワクチンでは対策できないことが知られています。一筋縄ではいかないと想像されますが、知恵を振り絞って対策を考案したいと思えます。また、養殖業だけではなく、水族館でも多くの感染症が発生し、飼育員を悩ませています。現在、沖縄県の美ら海水族館と共同で原虫病対策を行い、いくつかの展示が困難であった魚類の展示に成功するなど、対策の効果を実感して頂いています。今後も、希少な魚類を多くの皆様に観賞頂けるように、水族館との連携も大切にしようと思えます。魚病学は応用学問ですので、対策を考えることが最も重要ですが、その一方で、研究の過程で病原体と宿主魚類の攻防という興味深い生物現象を見ることが出来ます。すなわち、魚病は微生物と宿主魚類の相互作用の結果と捉えることもできます。前職の愛媛大学での兼任先が理学部であったことから、応用学問である魚病学を基礎学問的として考えることもできるようにになりました。三重大学では、学生とともに、現場の魚病対策を目指しつつも、生物学を築きましょうと思えます。研究室のホームページを作成致しましたので(<https://gyobyo.biome-u.ac.jp/>)、覗いて頂ければ幸いです。どうぞ、宜しくお願い致します。

します。

## 附属教育研究施設

### 附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンターから

#### FSセンター長 渡辺晋生

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。令和4年度よりFSセンター長を拝命しております土壌圏システム学研究室の渡辺です。専門分野は農業土木、特に土壌物理学です。各施設長、練習船運営委員長、施設専任教職員と協力し、FSセンターの発展に尽力して参りたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

令和6年度現在の附帯施設の長として、農場長に名田和義先生、次長に長菅輝義先生、演習林長に木佐貫博光先生、次長に沼本晋也先生・洲上佑樹先生、水産実験所長に松田浩一先生、次長に岡田拓巳先生、練習船運営委員長に石川輝先生がそれぞれ活躍しております。

技術部では加藤元保技術長と上尾智洋副技術長のもと、教育研究、地域貢献、各種生産販売に取り組んでおり、令和5年4月1日付で川本茂央氏が農場の技術員として採用されています。

事務部では令和5年7月に山下城事務室長、久保晴香係員の2名が、産休代替職員として令和5年12月に杉原智華係員が着任しています。

練習船勢水丸では令和5年3月31日付けで前第一弼機関長が定年退職を迎えられ、山本元樹一等機関士が新機関長へ、岡藤洋二等機関士が一等機関士へそれぞれ昇進し、新たな二等機関士として東岡良真氏を採用しました。また、令和6年4月1日付けで

前川陽一船長が退職され、中村亨一等航海士が新船長へ、奥村順哉二等航海士が一等航海士・通信長へ、高野雅貴三等航海士が二等航海士へそれぞれ昇進し、新たな三等航海士として御手洗紫野氏を採用し練習船

において船員の世代交代が進んでいます。コロナ禍の3年間は、FSセンターの大事な側面である「実物を見て触って考える」という場を、教育、研究、社会連携のいずれにおいて十分に整えることが難しい状況をお伝えしましたが、令和5年度にはいくつかのイベントと講座を除き、ほぼ全てを従前の規模で再開することができました。また、本学の掲げるビジョン2030、「地域・社会・世界とのつながりを通して行動を引き出す教育」、「社会競争を支える多様で独創的な研究」、「三重モデル地域創生」においても、あるいは令和6年度からの生物資源学部の改組においても、フィールドDX教育の推進や、それに基づくバイオDX人材と地域環境人材の育成、紀伊・黒潮生命地域を起点とした特色ある多様な先駆的研究と分野横断型研究の展開、そして各施設や練習船を利用した基礎的研究に基づく現場適応型の研究の推進など、FSセンターに求められる要素は多々あります。FSセンターは様々なフィールドデータの宝庫でもあり、コロナ禍で進んだオンラインコミュニケーションの利用拡大やインフラ設備と合わせ、生物資源関連産業をDXで支える地域人材の育成や、脱炭素社会に向けた教育研究などへの貢献もますます期待されます。これまで本学の教育研究課題への取り組みはもとより、他大学の学生教育や共同利用、社会貢献・地域連携事業を担ってきた実績を持つFSセンター各施設の存在は、近隣の他大学にない大きな強みとなっています。FSセンターは令和4年の20周年を越え、新たな一歩を踏み出したところではござい

ますが、これまで同様に教職員が一丸となって教育・研究・地域貢献に努力して参りますので、同窓会関係各位の変わらぬご支援・ご鞭撻をお願い申し上げます。

## 農場だより

農場長 名 田 和 義

三翠同窓会の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

最近の農場の状況について皆様にお知らせしたいと存じます。農場は三重県津市の高野尾町に位置し、伊勢自動車道の芸濃インターの傍らにございます。35・2haの広さの場内に水田、果樹園、水耕栽培温室、飼料作物圃場、牛舎、農産製造室などがあり、同一敷地内で様々な農畜産物の実習、生産から加工、販売まで行っている全国でも極めて稀な大学附属農場です。講義室や調理室が入っている管理棟や学生宿泊所も平成25年度に改修され、学生が快適に受講したり宿泊したりできるようになりました。学生は充実した環境で実習を受けることができ、評判も上々です。令和6年4月時点の職員構成は、専任教員が3名、技術職員が9名(内非常勤職員1名)、事務職員が9名(内非常勤職員2名)となっております。昨今では、自分たちの食べ物がどこからどのようにやってくるのか知らない学生や現場を持たない研究への危惧もございますので、実習のみならず共同研究や共同利用なども通じて、フィールドという特徴を活かした農場における教育・研究活動が今後ますます盛んになることが期待されます。

農場で生産された生産物やそれらを加工した缶詰、ジャム、味噌などの品々は、市内のスーパーマーケット、農産物直売所や道の駅などでも販売されています。農場は松阪牛の生産地域として指定された地域に

位置しているという利点を活かし、三重県の特産品である松阪牛の飼育と出荷をしております。様々な場所で三重大学農場産の生産物や加工品が販売されることで、「三重大学」の名前が世間に広まっており、農場の生産物が三重大学の広報にも役立つといえます。そして、令和2年3月にはJGAP認証を取得しました。GAPとはGood Agricultural Practiceの頭文字を取ったもので、農林水産省では農業生産工程管理と呼んでいます。長年にわたって農場は「食の安全」、「環境保護」、「労働安全」を担保する様々な取り組みを実施し「農場の見える化」に取り組んできましたがGAPのひとつであるJGAP認証の取得はその結果の一つの現れと考えております。

近年、大学は様々な社会貢献が求められており、本農場もその例外ではありません。これまで行ってきた教育・実習のコンテンツや研究の成果を社会に還元することを目指しております。そこで、農場では社会人を対象とした大学ファーム「楽農講座」で農業技術の紹介や普及活動を行い、農業への関心向上を図っております。令和2年〜4年度では楽農講座はコロナ禍の影響で休止しておりましたが、令和5年度10月から再開され、令和6年度は年間を通じた農業体験や食品加工の実習を実施する計画であります。また、津市内の小学校・津市教育委員会・JA・東海農政局と協力・連携し、小学生を対象とした三重大学教育ファームも開催しています。地域の小学生が、農業体験や食品加工の体験を通じて、普段口にしていない食料がどのように生産・加工されているのかを学び、農業に対する理解や食べ物を大切にする心を育む活動にも力を入れています。令和5年度は小学校1校の全年学年を対象として田植えやサツマイモの収穫、豆腐作りなど計8回の実習を行いました。夏休みには、小学生にトマトの収穫か

らトマトジャムの加工・販売までを体験してもらった公開講座を農業直売所と連携して開講し、講座を修了した学生には「トマトマイスター」という称号を授与しました。夏休みの良い体験となったと好評でした。また、中学生を対象とした農業インターンシップの受け入れも行っていきます。生徒や社会人を対象としたこのような取り組みのほかに、夏季に開講される共通セミナーへの三重短期大学学生の受け入れと本学による単位認定など、他大学を対象としたサービスマも行ってまいります。

また、東紀州サテライトの地域拠点サテライト事業に対し、農場から吉田智晴技術専門員と樋口伸一技術員が参加することになりました。吉田技術専門員は尾鷲の特産品である甘夏を使った農産加工品の開発及び甘夏園のJGAP認証取得への支援、樋口技術員は熊野市の新たな特産品として期待されるアシタバの栽培現場の調査と栽培の検討を担当することとなり、若手技術職員が活躍の場を農場外においても積極的に広げてまいります。

農場の活動やトピックについては、随時ホームページ(<http://www.bio.nie-u.ac.jp/academics/facilities/fsc/farm/>)に情報が掲載されます。ご興味をお持ちの方は是非アクセスしてください。

## 平倉演習林の現況

演習林長 木佐貫 博 光

三翠同窓会の皆様には、お元気で活躍のこととお慶び申し上げます。令和4年度から5年度の演習林長は、石川知明教授(森林資源環境学講座森林利用学教育研究分野)がお務めになりました。令和6年度より林長を拝命した木佐貫博光(同講座森林保全生態学教育研究分野)が、演習林の現

況についてご報告いたします。

### 【入事】

演習林の事務や学生実習対応で長らくご活躍いただいた日置千鶴代さんが、令和5年に退職されました。次長の沼本晋也准教授および洲上祐樹准教授、技術職員の上尾智洋さん(FSC副技術長・演習林グループ長)、山本拓史さん、上尾京子さん、小島優人さん、非常勤職員の新田昌臣さんの皆さんには、管理運営ならびに学生実習対応を中心に業務に携わっていただいております。

### 【教育・研究】

三重大学では、伝統的に現場で活躍できる人材の育成に重点を置いた実習の力リキュラムを組んでいます。令和5年度に実施された実習は次のとおりです。

- FSC演習林実習Ⅰ(森林植物学)
- FSC演習林実習Ⅱ(測量学)
- FSC演習林実習Ⅲ(森林利用学)
- FSC演習林実習Ⅳ(森林計測学)
- FSC演習林実習Ⅴ(深流保全学)
- FSC演習林実習Ⅵ(公開森林実習)

特別調査研究特別実験

演習林体験演習 (大学院博士後期課程)

1年生対象の生物資源活動タイム(自然科学概論「森は生きている」)

(教養教育/農林体験セミナー) この他、インドネシア共和国ムラワルマン大学との国際交流プログラム「International Student Exchange Program, Faculty of Forestry, Mulawarman University 2023」の受け入れ、JICA/JST SATREPS「ロシエクト」によるJICA研修生の見学受け入れがありました。

研究での利用については、生物資源学研究科教員などによって、GNSS測位に関する研究、イヌブナの遺伝的変異に関する

研究、温帯落葉広葉樹の樹皮の水分透過性評価に向けた樹幹周囲長と樹液速度の計測、森林作業における熱中症リスクの可視化と共有システムの構築、スギ人工林の長期固定試験地調査、天然林の動態に関する研究などがありました。その他に、地上型レーザースキヤナによる針葉樹の三次元モデル化(工学研究科)、水車の発電実験(工学研究科)や、人工林内の土砂移動試験(三重県林業研究所)がありました。

#### 【地域連携・社会貢献活動】

演習林では、地域連携と社会貢献のために教育・研究の場を提供して参りました。地域圏大学として地域社会における青少年教育ならびに生涯教育を目的に、津市立三重短期大学の学生向け公開講座、三重県内の小学生を対象とした公開講座「源流の森を歩こう!」の開催、演習林保全活動「平倉の森へOB集合」の森林ボランティア企画・開催、技術職員による松阪市内の小学校での出前授業の実施などを行いました。また、市指定の森林セラピーロードを含めたアクセス道の整備、資源確保としてのアマゴの養殖を行いました。

なお、演習林の一般公開については、ナラ枯れなどに伴う立ち枯れ木が散在して危険であること、シカによる植生劣化に伴って不明瞭な歩道が増えたことから、舗装道路の一部に限定して行っています。

#### 【林況】

シカの頭数が過剰な状態は依然として継続しており、人工林の主伐も植林もともになされておられません。人工林での主伐停止後は、主に利用間伐が行われています。天然林では、主稜線を被っていたミヤコザサやスズタケがすっかり姿を消し、下層植生はさらに衰退し、見通しがよくなりました。このため、歩道の正確な位置が不明瞭な場所が増えることになりました。稜線では、林床のみならず、林冠木についてもブナを

中心に枯死木が目立つようになりました(写真)。このブナ天然生林は、紀伊半島における貴重な天然林のひとつですが、後継樹が見当たらないため衰退しつつあります。ナラ枯れ被害木が初めて確認されたのは2017年夏でした。その後急速に被害木が増加し、西ノ俣のモミ・ツガ天然林に林立していた大径木はほとんど枯れてしまいました。この他の地域においてもナラ枯れ被害が急速に拡大し、少数のみ自生するコナラや植栽木クヌギの枯死が目立ちます。

関連して、令和4年度に、東俣の量水堰堤よりも奥にある歩道の一部が作業道として技術職員によって整備されました。これにより、実習・調査地へのアクセスの改善、森林管理の効率化がもたらされました。

このような演習林の現況でございます。これからも、水源に位置する演習林の豊かな森林環境を少しでも良い状態で維持管理して参る所存でございます。今後とも卒業生関係の皆さまの益々のご指導、ご支援を頂戴できましたら幸いに存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。



稜線ではブナの枯損木が増えている

### 水産実験所だより

水産実験所 松田浩一

三翠同窓会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、日頃より水産実験所へのご支援

を賜り、厚く御礼申し上げます。

水産実験所の近況を報告させていただきます。前号(16号)では、英虞湾の座賀島にありました水産実験所が鳥羽市小浜地区へ移転し、新たな地で活動を再開したこと、それまで専任教員1名の体制が3名となり、水産生物の生態や増殖、スマート水産業構築、環境センシング、低未利用海洋生物の活用等の研究に取り組んでいることを報告いたしました。これらに加えて、鳥羽市と三重大学大学院生物資源学研究所(水産実験所が中心的な立場)が締結した覚書によって設立されました「鳥羽海洋教育研究センター」の取り組みとして、海洋環境の保全や漁業等の地域産業を背負う地域人材を育成する海洋教育にも取り組んでいきます。地域との連携に係る活動としては、水産実験所がある鳥羽志摩地域に位置する海洋・水産関係の8教育研究機関(三重大学以外に名古屋大学大学院理学研究科附属臨海実験所、ミキモトグループ、鳥羽水族館、鳥羽市(国研)水産研究・教育機構(水産技術研究所)、鳥羽商船高等専門学校、三重県水産研究所)が連携した研究を展開するとともに、地域人材の育成にもかわる「伊勢志摩海洋教育アライアンス」が令和4年10月1日に正式に発足しました。この枠内では、水産研究・教育機構(水産技術研究所)、三重県水産研究所、鳥羽市の海洋・水産機関(海の博物館、鳥羽市水産研究所)において本学の学部生や大学院生に対する講義・実習、インターンシップ等に協力していただいています。また、後述しますが研究活動においても各種のプロジェクトを進めており、地域内での連携が強固なものとなりつつあります。

令和5年度以降におきましても活動範囲はさらに広がり、地球温暖化の要因となっている二酸化炭素の吸収源として注目されているブルーカーボンに関する取り組みに

も注力しています。具体的には、海洋環境センシングを専門とする岡辺准教授が中心になり、「伊勢志摩海洋教育アライアンス」の企画機関である鳥羽商船高等専門学校や三重県水産研究所、鳥羽市水産研究所等とともに、二酸化炭素の吸収を担う藻場の面積や体積を漁船などの船舶が収集する画像の解析によって自動計測するシステムの開発を(国研)情報通信研究機構のプロジェクトとして行っています。また、海洋生物の有効活用を研究している山本助教は、多様な藻類の二酸化炭素吸収能の評価と、藻場による二酸化炭素吸収力を高めるために有効な藻類の選定と育成の技術開発を京都大学等との共同で実施しています(EDDOムーンスヨット型研究開発事業)。

三重県における近年の海洋環境の大きな変化として、平成29年8月に始まった東海沖での黒潮の大蛇行を主な要因とする沿岸水温の上昇があります。令和6年5月現在、黒潮大蛇行は気象庁による1965年以降の観測で最長の約7年間継続しており、終息の兆しは見えていません。黒潮が大蛇行すると黒潮の本流が熊野灘に接岸、あるいは黒潮から枝分かれた内側反流が熊野灘に到達し、熊野灘沿岸の水温が上昇します。これに地球温暖化に伴う気温の上昇も相まって記録的な高水温となっています。特に冬期水温の上昇が大きく、魚貝類や海藻類の分布・生育に大きな影響が出ており、これまで普通に見られていた海洋生物が少なくなり、南方系の種が増えてきました。

強く影響を受けているのは移動能力が乏しい定着性の種であり、黒潮の大蛇行以降で藻場が急速に衰退し、イセエビやアワビ類、サザエ等の漁獲量が大きく減少しています。水産実験所は、漁業生産活動が活発な伊勢志摩地域に位置していることから、生態系の変化や漁業を取り巻く環境の厳しさを目の当たりにしています。気温の上

昇や黒潮の流路変化は地球規模の変化であり、研究者個人や一組織で抗うことは困難ですが、こういう時にこそ地域とともに歩み、地域の発展に貢献する三重大学の出番であると考え、漁業者や漁業団体、自治体と連携し、現状の把握や環境の変化に対する適応策の検討等の取り組みにも力を入れています。

水産実験所は、鳥羽市へ移転してから3年以上が経過し、従来からの科目である臨海実習や藻類学実習、浅海増殖学実習のほか、令和6年度から変更になったカリキュラムでは海洋情報学実習、フィールド科学技術実習等の実習科目が新設され、令和7年度からの実施を予定しています。また、三重大学の大学による実習利用や小中学校の施設見学等も増えてきました。今後も、海洋・水産に係る教育研究活動を充実させるとともに、地域に開かれ頼りにされる水産実験所となるように教職員一同、努力してまいりますので、同窓会の皆様方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしく願います。

## 練習船勢水丸近況報告

附属練習船勢水丸

船長 中村 亨

会員のみなさまにおかれましては、お元気で過ごされていること存じます。附属練習船勢水丸です。本船の近況についてご報告いたします。

昨年度は新型コロナウイルスの位置づけが第5類感染症に移行され、本紙の令和4年第16号でお伝えしました様々な制限について、若干ですが緩和して運航することとなりました。特に7部屋ある学生居室を個室対応としていたところを、定員の半数まで乗船可能として、4人部屋×5室にそれ

ぞれ2名、2人部屋×2室にそれぞれ1名これに教員室に1名を加えて最大13名(予備室は急な発熱者などに備えて隔離部屋として確保)を定員としました。これにより個室対応時と比較してほぼ倍の乗船定員となったわけですが、それでも同一の実習を1航海で完結することができず、同内容で2回から4回の航海を繰り返して実施しなくてはいけない状況が続きました。3年以上の学生が履修する、海洋総合航海実習(東シナ海でのトロール航海)についても、「2日以内に松阪港に帰港できる範囲」とされていた航海海域の制限は解除されましたので、東シナ海での漁業実習も可能でしたが、先に述べた乗船定員の都合によって日程の確保が難しい状況は変わりませんでした。結局、漁業実習は熊野灘で小規模なビームトロールネットを使用し、2航海のみ実施しました。昨年度の運航実績を簡単に記しますと、教育(実習)航海が28航海、延べ85日、乗船学生延べ222名、調査・研究航海が4航海、延べ24日、乗船者延べ48名、地域貢献・社会貢献航海等が3航海、延べ4日、乗船者延べ24名、その他に、検査工事のためのドック航海と台風避難航海がそれぞれ1航海ありました。

今年度はついに乗船定員を従来の定員(予備室を隔離部屋として確保することは続行)として運航することとなり、東シナ海でのトロール実習や松阪港以外の港への寄港も計画されています。新型コロナウイルスは5類に移行されたとはいえ、未だに感染報告もありますし、新型コロナウイルス以外にも季節性インフルエンザやその他感染症の心配も消し去れません。船内での集団感染などに陥らぬよう、今後も一層の注意を払い航海を継続したいと考えています。

また、毎年実施している検査工事ですが、本船は建造15年が経過して、建造時から数えて4回目の定期検査となり、検査項目も

徐々に厳しくなってきました。一例をあげますと昨年の定期検査ではすべてのタンクについて、内部検査もしくは圧力検査が加えられました。残燃料油のシフトや廃油陸揚げなどの検査準備に始まり、各清水タンク、燃料油タンク、潤滑油タンク、廃油タンク、クリンビルジタンク、コフアダムなど、船のサイズと同じく決して大きいとは言えないタンクの内検に航海士、機関士とも四苦八苦して受検しました。定期検査は大きなトラブルもなく無事に合格しました。今後は船齢を重ねるたびに不具合箇所も増えてくるのが考えられますが、最重要である「安全航海」を成就させるために、これまで以上の緊張感を持ち、教育効果の高い実習航海、質の高い調査・研究航海、有意義な地域・社会貢献航海を行っていく所存であります。

さて私ごとで恐縮ですが、今年度より船長(准教授)を拝命しました。私は平成15年に本船に採用され、三等航海士から一等航海士として約20年乗船勤務してきました。勢水丸の5代目の船長として、これまでの歴代船長の方々に、少しでも近づこうとができるよう精進してまいります。また、新たに三等航海士が採用され、4年ぶりに女性乗組員が加わりました。本船は、実習学生のみならず研究者など学内外問わずに女性も多く乗船します。近年、性別のことを言うのも時代にそぐわないかも知れませんが、船舶という閉鎖された特殊な空間で生活する以上、様々な相談事も生じます。その際に、女性乗組員がいることは我々にとっても助かりますし、乗船者にとっても非常に心強くと感じます。そういった面でも三等航海士の活躍を期待しています。最後になりますが、これまでと変わらず会員の皆様からの叱咤激励をお願いいたしますとともに、皆様方の益々のご健勝とご活躍をお祈りいたします。

本船HP  
(<https://seisumaru.bio.nie-u.ac.jp/>)  
本船FB  
(<https://www.facebook.com/seisumaru/>)



写真:「第6回学内のおしゃれなスポーツ・学生生活での思い出写真」で「おしゃれ部門 冬」の優秀賞を頂いたものです。

### ▼自己紹介・奥村順哉先生

2024年4月1日より、生物資源学研究所附属練習船勢水丸に一等航海士・助教として着任しました奥村順哉です。

2015年4月に三重大学の技官(三等航海士)として採用されて以来、約10年間にわたり航海士として、生物資源学部での練習船を使った実習や研究航海に従事してきました。三等航海士時代は主に航海計器類を担当し、2018年に二等航海士に就任してからは観測機器類を担当して学生の指導を行ってきました。

今年度から一等航海士として、また教員としても従来の経験を活かし、勢水丸での実習で学生に洋上でのより実践的なオペレーションを経験してもらえよう指導していきたいと考えています。観測結果や採集物についても、高い精度を維持するとともに、現場の状況に合わせてオペレーションの手法やスケジュールなどを改善し、よ

り良い提案ができるよう努力していく所存です。  
どうぞよろしくお願いいたします。

## 研究基盤推進機構 鯨類研究センター

鯨類研究センター

副センター長 森 阪 匡 通

鯨類研究センターは、平成28年12月に研究所内の附属教育研究施設のひとつとして設置され、約7年半の間、研究所内の組織として活動してまいりました。2024年度からは、三重大学を代表する一つの特色ある研究組織であることから、全学組織である研究基盤推進機構内の一センターとなり、研究所内の一組織ではなくなりました。しかし、所属教員はすべて研究所所属であることから、研究所とは関連の深い施設として、ここでご紹介させていただくことになりました。

現在の体制としましては、センター長に学部長・研究科長の松村直人教授、鯨類学を専門とする2名の教員(森阪匡通教授・船坂徳子准教授)、そして2名の技術補佐員(有蘭幸子氏・神田育子氏)に加え、昨年度当研究科で博士の学位を取得し、JSTの科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業や学術振興会特別研究員制度の支援を受けたあと、2024年度から研究科教員となった八木原風助教を加えた6名体制となっております。これまで鯨類研究センターを率いてくださり、2023年度より理事・副学長となられた吉岡基教授にも、様々なご助言をいただきながら運営しています。

本センターは男女比が半々であり、私を含め3名が子育ての真っ最中で、研究所内の鯨類学研究室(2023年10月に生物圏生命科学専攻海洋生物学講座内に新設)に

はイギリス(研究生)と韓国(博士前期課程学生)からの留学生が所属しているなど、ダイバーシティ豊かな職場です。遠距離通勤、時間の確保の難しさなど、難しい課題に直面しつつ、ワークライフバランスとは何かを常にみんなで考えながら、鯨類のあれやこれやを楽しく議論しております。

本センターは、総合研究棟ⅡB内に4部屋を借りて研究活動を行っています。水族館等において、鯨類の伝統的飼育を進めるための繁殖研究基盤を整備するためにセンターが設置された経緯があり、特に繁殖生物学や生理学の分析ができる様々な機器を揃えております。そして学内の他の先生方がこうした機器を使えるように共同利用の体制を整え、少しずつではありますが、利用いただいています。国内の様々な水族館に飼育されている鯨類の繁殖やストレスに関連するホルモンに関する基礎研究や、人工授精のためのイルカの精子の凍結保存に関する研究などを行っています。

一方、研究室を出て、様々な地域で、野外や水族館での観察研究も多く行っています。ここ数年は、三重大学の目の前にある町屋海岸と伊勢市で、目視観察とドローンを活用して小型の鯨類であるスナメリを調査しています。こうした地域に暮らす動物を、地域の子供たちが知り、それを誇りに思うことも大切と考え、三重県総合博物館をはじめ、三重県内の小学校などでの学習会も開いています。また別の研究フィールドである青森県むつ市などでも同様に小学校での学習会を学生中心に行っています。

大学の組織上は、生物資源学研究科の附属教育施設ではなくりましたが、今後も研究科とは深くかかわりあひながら、教育研究活動を展開してまいりますので、同窓生の皆様におかれましては、引き続き本センターの活動を見守っていただければ幸いです。

## 大学院 地域イノベーション工学研究科

諏訪部 圭 太

地域イノベーション工学研究科は、高度な研究開発能力に加え、地域の問題を解決できる人材の育成をめざす日本初の大学院として平成21年に発足しました。設立当初は先端融合工学ユニットと総合バイオサイエンスユニットの2種の理系専門分野で構成していましたが、地域ニーズの高まりに因應するために、地域や組織に変革を起こす社会起業家(ソーシャル・アントレプレナー)人材を育成するための「社会イノベーションユニット」の追加や、文理融合型の博士後期課程「地域新創造ユニット」への組織改編を進め現在に至ります。本学を構成する全学部から教員が結集する学部組織のない独立研究科であり、教員および学生を含めたすべての人材の高い多様性と既存の学問体系にとらわれない独創的・学際的教育・研究組織というのが本研究科の特色です。

また、地域とともにムーブメントを共創する産学官およびヒト・モノが結集する「集いの場」として、「地域イノベーションのハブ拠点」になることも目指しており、近年特に注力しているのが「社会人の学び直し」です。本学におけるリカレント教育やアントレプレナーシップ教育と連携しながら、社会人の皆様が学びやすい環境を整えて参りました。三翠会員の皆様には、ぜひ本研究科での学び直しをご検討下さればと願っております。

現在、三翠会員として、小林一成教授(農31)、野中章久教授、諏訪部圭太教授(生H10)、狩野幹人准教授(機H6)、加賀谷安章准教授(博H10)が本研究科に在籍しております。また、以前に専任教員をお務め頂いた苅田修一教授(化30)と三島隆准

教授(化院29)には引き続き兼任教員として本研究科の教育にご尽力頂いています。設立からまだ15年と歴史は浅い研究科ですが、生物資源学部卒業生の進学先のひとつとして、また、一般学生と社会人学生が共に学び切磋琢磨する場として精進を続けますので、生物資源学研究科に加えて本研究科の活動も見守っていただければ幸いです。

## 放送大学で学んでみませんか?

梅川 逸 人(院14回)

私は三重大学を定年退職後の2年間、参与・特命副学長として引き続き三重大学にお世話になった後、昨年4月に放送大学三重学習センターの所長に就任いたしました。放送大学の名前をご存じの方は多いと思いますが、放送大学がどのような大学かはあまり知られていないと思います。その放送大学のご紹介をさせていただきますと思います。

昨年放送大学は設立40周年を迎え、学生数は累計で182万人以上です。千葉市に本部を置き、全国57ヶ所にキャンパスがあります。2023年度1学期の時点での学生数は約85,000名で、女性が53%と男性よりやや多い状況です。放送大学三重学習センターは、平成6年に三重大学の協力のもと、三重県によって誘致されました。三重県総合文化センター内の三重県生涯学習センター棟4階にあり、約700名の学生さんが在籍しています。放送大学と聞くとしニアの学び直しのイメージがありますが、比較的年代のバランスは取れていて、全国的には20代(15%)、30代(15%)、40代(20%)、50代(21%)、60代(14%)、70代以上(12%)となっております。これ

には最近マスク等がよく言われているリスキリングが関係しているのではないかと思っています。放送大学は英語名のThe Open University of Japanが示すように、学んでいる人も、学びたい人も、学ばなきゃって人も、すべての「学びたい」にOPENで、必要な科目のみ1科目から学べます。学部への入学試験はなく、書類で入学できます。入学のチャンスは4月と10月の年2回あり、短大卒や高専卒の方は編入学が可能です。学部は教養学部教養学科の1学部1学科のみの単科大学で、幅広い分野を学べるよう6つのコースが用意されており、全履修生はこの中から一つ選んで所属します。大学院修士・博士の全科生は年1回の募集で選考試験があります。大学院修士課程は7つのプログラム、大学院博士後期課程には6つのプログラムが用意されています。また、種々の資格が取得できるのも放送大学の大きな魅力の一つです。現職教員の方は上位・他教科・隣接校種の免許、准看護師から看護師へキャリアアップ、看護学の学士、認定心理士や臨床心理士、学芸員の他、多数の資格が取得可能です。放送大学の授業はBS放送やインターネット等で視聴でき、単位認定試験もネットで受験可能です。自分の専門でもある「食と健康」の講義を全回視聴しましたが、クオリティはすごく高いと思いました。また、講師から直接学ぶ面接授業が全国のキャンパスで開講され、放送では体験できない実習や実験等もあり、他の学生さんと一緒に楽しく学ぶこともできます。一般の大学と同じようにサークルや同窓会があり、学生同士やOBの交流も盛んです。そして、規定の単位を取得すると卒論を履修できます。放送大学では卒論は卒業単位とは無関係ですが、生物資源学部と同様に大変重要です。十数年前、生物資源学部に在籍中に放送大

学の学生さんの卒論を指導したことがあるのですが、その方は本当に一生懸命取り組んでくれました。卒論発表会は千葉の本部で行われ、私も参加しました。その学生さんは一度卒業された後、コースを変えて現在も在学しておられます。

以上のように、放送大学は退職された方には学び直しを、現役の方には仕事で必要なスキルを身に着けるなど様々なステージ

# 恩師を偲んで

## 山田哲也先生を

偲んで

久松 眞 (院8)

山田哲也先生は、令和4年7月24日ご逝去されました(享年85歳)。新型コロナウイルスが流行る少し前のことですが、三翠同窓会総会前に開催された化学会の総会にご出席いただき我々は少し驚かされました。「久松君、忍者の研究で頑張ってるんだね、テレビで見ているよ」と久々に耳にしてお元氣な声をお聞きしたばかりなので、この訃報の連絡はあまりにも突然のことでした。

私は学生時代3年と教員時代15年の計18年間同じ食品化学研究室で山田先生には大変お世話になりました。お年も丁度一回りの違いで同じ風年だったと記憶しています。私が学生の頃研究室の教授は滝基次先生でした。滝先生は、ウルチ種とモチ種のトウモロコシにハイアミロ種の遺伝子を交配法で移し新しい物性をもった澱粉作りに取り組んでおられたことから、私の修論は

やタイミングでの学びが可能です。放送大学の詳しい内容はホームページをご覧ください。ただ、三重学習センターにお越しただければ、ご説明させていただきます。どうかよろしくお願いいたします。

品種間の澱粉構造を比較する研究テーマでした。山田先生は名古屋大学の博士課程で行っておられたお茶の葉の配糖体等の研究を三重大学でも継続されていましたが、分子レベルで澱粉の構造研究ができることを知ってこの分野の研究にも興味を持たれ、新しい澱粉の加工や活用法に関する研究を精力的に進められ多くの学生の研究を指導されました。

山田先生は専門書や論文を超高速度で読破し、それらの内容を正確に記憶する能力が特に優れておられましたので、先生の情報量の多さからくる研究指導法は独特なものがありました。逆に指導を受けた学生達は、当初は研究手法の理解が容易でなため苦労するのですが、卒論や修論等の発表となると不思議なことに研究成果が生まれていて悩んでいた学生とは信じられない元氣な姿で発表していました。このような山田マジックは今も思い出されます。

長いお付き合いの中で研究室のドライブ旅行も印象に残っています。観光ルートは博士の山田先生にすべてお任せでしたが、今思うと研究と同様に深い洞察力で考えら

## 放送大学三重学習センター

〒514-0061  
三重県津市一身田上津部田1234  
三重県総合文化センター内  
三重県生涯学習センター棟4階  
TEL: 059-2333-1170  
FAX: 059-2333-1179  
E-mail: mie-sc@uj.ac.jp

## 関口秀夫先生の思い出

海洋生態学研究室

木村 妙子

令和五年一月十七日に恩師、関口秀夫先生がご逝去されました。前年十一月に体調を崩され入院されてから二カ月足らずのことでした。享年七十八歳でした。

先生は九州福岡のお生まれで船乗りになられ、長崎大学水産学部に入學されました。しかし、視力が悪かったため船乗りになることは諦め、卒業後、東京大学大学院に進学されました。昭和四十八年に海洋動物プランクトンのカイアシ類の生態研究で学位を取得された後、三重大学水産学部に着任されました。イセエビ、ラスバンマメガニ、

アサリ、ヤマトシジミなど三重県沿岸の海洋生物を対象に、浮遊幼生期から底生期への初期生活史やこの加入過程が個体群の動態に重要であることを明らかにされました。また、伊勢湾全域の底生動物群集の長期調査により、海底の貧酸素水塊の出現と動物相の変化との関係を明らかにされました。勢水丸や漁船を使って精力的に調査し、その研究成果を数多く発表されました。そして、その過程で多くの学生を指導され、研究者を育成しました。

私は学部二年の座賀島での臨海実習の際に高校時代に書いた論文について先生からコメントをいただいで以来、大学院、ポスドク、そして同じ研究室に着任してからも研究の姿勢から技術的なことまで、教えていただいたことは計り知れず、私の人生の最大の師と言える人でした。

先生は研究を大切に、規則正しい生活をされる方でした。早朝から自転車ですべての作業をこなして、論文執筆をされ、昼休みには学生とソフトボールやバドミントンをして、夕方前には帰宅される毎日でした。私がのろのろと昼前に研究室に行くのと先生はすでにひと仕事終えた後で、自室の長椅子の上に書きかけの論文をいくつも並べられ、クラシックやジャズを聞きながら安楽椅子に深く座って本や論文を読まれています。研究相談にはいつも快く乗ってください。詳しい解説をしてくださいました。生物の同定などで先生にもわからない場合には専門の研究者や海外の博物館にコンタクトしていただき、できるだけ早く解決できるように配慮もいただきました。また貧血低血圧の私を見て、「妙子、顔色悪いなこれ飲め」と言われ、朝鮮人参のお茶やコーヒを勧めてくださいました。お酒や美味しい食べ物が好きで、よく学生たちと宴会をして、飲んで食べて、闊達に議論をかわ

されてきました。

先生の研究に対する姿勢は厳しく、仮説にもとづいて調査をし、検証するという科学的な認識過程を重視し、言葉の定義についても厳密な方でした。毎週の研究室のゼミ発表などで甘い論理展開をするや容赦ない叱責が飛んできました。また学内の発表会や学会大会などでも遠慮のない鋭い質問やコメントをするので、発表者がタジタジとする場面を何度も見ました。

平成十九年三月に大学をご退職されてからも活力は変わらず、自転車ですべての作業に頻繁に通われ、自然観についての思索を深められ、継続的に論文や評論を発表されていきました。また、これまでの豊富な経験を活かして多くの省庁の検討会の委員を務められ、環境保全の提言をされてきました。私には論文も書けたらいつでも見てあげてからとありがたい言葉をいただいでいたが、筆が遅くあまりお見せすることができなかつたことが心残りです。

最後に直接お会いしたのは、コロナの制限がもつとも厳しかった令和二年に出版した底生動物の生態の教科書と幼児向けのしかけ絵本をお渡しした時でした。私が書いたものについては厳しいコメントをするのが常だった先生が、とても喜んで褒めてくださったのに驚きました。入院されてからもコロナ禍でお会いすることもできないまま、逝去の報を聞くことになりました。

先生が亡くなられてから二ヶ月ほどして、日本動物分類学会の編集長からメールが届きました。秋に投稿された関口先生の評論があるのだが、公表できないかというご相談でした。もちろん異存があるはずもなく、ご遺族に連絡をして遺稿として公表されることとなりました。最後まで研究をする姿勢を崩さなかつた先生は本当の意味で研究者だったのだなと思えました。そし

て亡くなる直前まで研究に打ち込み、楽しんで人生は幸せだったと思います。心からご冥福をお祈りします。

## 小宮孝志先生を

偲ぶ

生物機能化学研究室

勝崎 裕隆

小宮孝志先生は令和5年9月24日にお亡くなりになりました。

小宮先生は、名古屋大学を昭和45年に卒業された後、三重大学の農芸化学科の農産製造学研究室の助手として採用されました。その後、助教授、教授と昇進され、平成16年に退職されました。その間に、ドイツのミュンヘン工科大学へ留学も経験されておりました。研究室名も、改組等により、農産物利用学と名前も変わり、定年前の最後の1年だけは新設の食品機能化学研究室に所属していました。また、在職中に付属農場の農場長を就任されていたこともありました。

小宮先生の講義の思い出は、私が、学生時代受けた、外書講読でした。有機化学のドイツ語の本を使用しながら、ドイツ語の化学を勉強するものでした。多くの学生が、苦しんだ授業だと思います。この授業の関係かわかりませんが、その後小宮先生は、ドイツへ留学されました。私自身は、先生の担当されていた、学生実験や農産物利用学などの講義を受けることはありませんでした。ドイツからの帰国後、学生実験も担当されなくなり、外書講読はなくなり、農産物利用学のIとIIを長年講義されていきました。大学院では修士向けに炭水化合物利用学特論、博士向けに、生体成分酸化反応機構論などの講義も担当されていました。

小宮先生がドイツから戻られた頃に、名古屋大学から今井先生が赴任されました。

そのころの私は、食品化学の研究室に所属していましたが、その後、小宮先生が研究をされていた、名古屋大学の食品製造化学第1研究室というところへ進学し、学位をいただいでから、平成5年の12月から、当時の、農産物利用学研究室へ助手として赴任しました。それ以降、私は、小宮先生が退職されるまで、今井先生を含め、3人で農産物利用学研究室を運営してきました。小宮先生が、退職される1年前に改組で、農産物利用学研究室は生物機能化学研究室となり、新設する形で、小宮先生は1年だけ食品機能化学研究室に所属されました。しかし、学生は元の農産物利用学研究室の場所ですべての実験を行い、小宮先生も実質の元の研究室の場所で1年を過ごされ御退職されました。

小宮先生は、学生時代、名古屋大学の並木満夫先生のもとで研究されており、フリーラジカル関係の研究をされておりました。三重大学に赴任されてからは、研究室が澱粉を扱っていたこともあり、澱粉の研究を中心として、澱粉のラジカルや活性酸素による傷害などの研究もされておりました。私が赴任したあたりから、医学部の看護学科の桶廻先生と共同研究を進め、がん細胞にアポトーシスを起こすような植物由来の成分の単離や構造解析がメインの研究テーマとなりました。この頃は、農場長であつたこともあり、農場で取れるものを用いた植物を数多くサンプルとして扱っていました。博士課程の学生の指導も行い、課程博士、論文博士を含め何人かの博士も育てられました。小宮先生との実験の思い出は、小宮先生はドイツ帰りもあるのかもしませんが、三角フラスコをコルペンと呼んでいました。はじめ、私や学生もコルペ

ンと聞いて頭の中に??が出ていました  
が、小宮先生が手で三角フラスコを持って  
いるのを見て、三角フラスコがコルペンか  
とわかりました。調べてみると、ドイツ語  
で三角フラスコをコルペンと呼んでいるこ  
とがわかりました。

研究室内の行事は4月の借楽公園の花見  
から始まります。花見は日が落ちてしま  
うと寒すぎて、夜桜見物というわけにい  
きません。小宮先生の一声で、借楽公園を一回  
りしてから、津駅近くの小宮先生の馴染  
みの居酒屋へすぐに移動し、そこで、飲  
談するというのがお決まりのコースで  
した。夏は、大学院の試験が終わった時に、就職  
の決まった人のお祝いを兼ねて、暑気払い  
のコンパが企画されていました。院試直後  
なら、合否もないので気にせずに、お酒  
が飲める。また、外部から院試を受け  
てくる人も一緒に飲談できるとい  
うことになり、これはなかなかよい  
コンパでした。また、卒業時も、謝  
恩会に参加しない在校生も謝  
恩会後に集めて飲めるようにあ  
らかじめ店を抑えておくとい  
うのもありました。宴会を通  
してですが、小宮先生は、研究  
室全員に配慮したよい会  
を企画してくれていたと思  
います。

また、いつも3時には決ま  
って、実験の手を休めてコー  
ヒーや紅茶を飲んで飲談す  
るといふのもありました。小  
宮先生も忙しくなってきた  
からあまり参加できなくな  
りましたが、これも、学生  
との距離を縮め、雑談とい  
え有意義な話があったこと  
を覚えていて。今は、いろ  
いろな行事がこなすなど  
を経て変わってしまっ  
ていますが、小宮先生が  
いた頃は、学生と教員  
の距離がかなり近かつ  
たと思います。

退職後は、東海学  
園大学や名古屋女子  
大学で教鞭を執って  
いました。学会の時、  
中部の支部例会など  
では、多く女子大生  
を連

れて、参加されておりました。かなり女子  
学生に人気があったのではと思  
います。私の想像する限りでは、一つ  
思いつくところがあり、いつか  
から覚えていませんが、三重大学  
にいた頃の、小宮先生のトレ  
ードマークはサスペンダーで  
した。おそらく、このサスペン  
ダーをして、女子大で講義を  
し、お茶目な感じが女子大生  
に映り、学会へ学生を連れて  
来られるほどの人気があつ  
たのではないかと思います。

完全に大学関係を離れてから  
は、さらに他の趣味を始めたよ  
うで、年賀状に絵を描いて送  
つておられ、最近では絵を描  
いておられる。三重大にいた  
頃は、暮が趣味でよく打つて  
おられました。完全退職後に  
新しい趣味を始められるとは  
好奇心旺盛な先生だと思つた  
ことも覚えています。

こころよりご冥福をお祈り  
申し上げます。残された私  
たちも先生が残してくださ  
った教えをこれからも肝に銘  
じて精進していきたいと思  
います。

### 山口 献三先生を しのぶ

農産製造学研究室

升井 洋 至 (大32修)  
(武庫川女子大学 食創造科学科 教授)

山口 献三先生が、2022年7月9日  
亡くなられたとの連絡が、同窓  
会事務局にありました。ご在職  
時、私たちが卒業生には、ご  
自身のことをあまり多くを語  
られることがありませんでした。  
在学時より、なぞの多き先生  
でありました。なぜか、口元  
に煙草を加え、少しずれた老  
眼鏡の上から、上

目で見られる笑顔の印象が  
強く、印象に残っています。

3年次の附属農場への農芸  
化学実習に大からバスで行  
く際には、作業着姿、右手  
にファイルを抱え、最前列  
の助手席にいつも着席し、  
時間厳守の徹底したもので  
した。

実習前の講義では、農場  
での茶葉の植え付け位置  
など、実習以外の山口先生  
のお考えなども教えていた  
だきました。農場での製  
茶、イチゴジャム、ピワの  
シロップ煮の缶詰製造等  
をご指導いただきました。  
ジャムやピワの下処理中  
に悪友ともども、果実を  
口に運びつつ、製造した  
ことを覚えていて、「食べ  
たら、収量が落ちるよ。」  
と注意をされておられま  
したが、どこも口元は笑  
つておられました。

小生(升井)が農産製造学  
研究室に所属した時期は、  
奈良省三先生のご退官後  
で、小宮孝志先生と研究  
室を運営されていた時期  
でした。卒論、修士の合  
わせて、3年間同じ研究  
室で過ごした際の思い出  
のことがあります。夜間  
に蒸留水製造装置の冷  
却水が漏れ、階下の土  
壌学研究室が水浸しに  
なることがありましたが、  
朝、「升井君、下の様子  
、見てきてくれんか。謝  
りに行く前に様子が知  
りたいから。」とい  
うつ、行きにくそうに  
口元に笑みを浮かべな  
がら、言われました。ま  
た、同期のI君がウ  
ドのポリフェノールの分  
析試料の調製時に何故  
か、引火して、カレン  
ダーが燃えました。小  
生はその事実を知りつ  
つ、翌日に、山口先生  
が部屋に入ってくる  
タイミンで、同じ場所  
にかけてある違うカ  
レンダーを触ると「昨  
日、ちよつと、いろ  
いろあつてな。エッ  
へ、へ…」と笑つて  
おられました。研究  
室で飲み会(確か、  
忘年会と記憶してい  
ます)の日に、「今日  
は、これで帰らな  
あかん。うちの言  
われてる…」と、  
すぐく照れ笑いしながら、  
帰宅されました。「…」

のところはご家族の良  
き内容だったと思  
います。普段、卒論  
指導では「やらん  
かったら、知らんよ。  
卒業できんよ。」  
「いつからやる  
のかね。どうな  
っているかね。も  
う知らんよ。」と  
厳しい言葉があ  
りました。しかし、  
研究生活の合間  
での出来事の思  
い出では、必ず  
笑いがありました。  
時折、話された  
ご家族のことは、  
ホツとする内  
容のものばかり  
でした。なか  
なか、ゆつくり  
とお話をす  
る機会があり  
ませんでした  
が、卒論を指  
導された者は、  
寡黙な山口先  
生であつた  
からこそ、学  
ぶところが  
多かつたと、  
今、改めて  
感じてお  
ります。諸  
先輩の方  
々には、も  
つと違つた  
良い思い出  
があると思  
います。

筆を進めるうちに  
あれこれと、違  
つた思い出が  
浮かんでき  
ます。小生の  
とどめな  
い思い出  
ですが、現  
在の小生の  
研究生活  
における  
学生指導  
の糧とな  
つており  
ます。山口  
献三先生  
のご冥福  
を心から  
お祈り  
いたします。



### 三重大学での18年間

酒井 俊 典

本来は令和6年3月  
をもって定年を迎  
えるはずでしたが、  
1年早く生物資源  
学研究所を退職  
し、令和5年4月  
から本学の理事・  
副学長を務めて  
おります。三重  
大学には、平成  
18年1月に赴  
任し早いもので  
18年が過ぎ  
ました。前任  
の愛媛大学  
には17年居  
りま

したので、津での生活はそれを越えたことになりす。三重大学に赴任するまで津は通過するだけで降りたことはなく、18年前に初めて津に来た時、何もない県庁所在地にびっくりしたことを思い出します。これは18年経った今でもあまり変わっていませんが。しかし、実際こちらでの生活をしてみると、津はいろいろと便利に生活出来る場所だと実感しています。特に交通の便が良く、生物資源学研究科で勤務していた頃は、行政の会議や現地調査などで全国各地に出かける機会が多く、沖縄、九州、四国、北海道など遠方でもセントレアから飛行機を利用して日帰りでの往復が可能でした。また、東京出張も夜9時頃まで東京駅周辺で飲んでいても最終の近鉄で津に戻ってこられていました。さすがに近頃はこれをやるのは体力的に少々きつくなってきました。

私の専門は農業土木分野で、その中でも地盤防災や老朽ため池対策など地盤工学を中心に教育・研究を行って来ました。研究を進める上で三重大学に赴任して良かったことは、本学の工学部に土木工学分野がなく、農水省関係だけでなく国交省や土木研究所、高速道路株式会社など多方面の情報が見られ視野が広がったことでした。三重大学に着任してすぐ、津市内の住宅陥没事故、四日市市内の不法投棄事故、名松線の復旧対応事故等々、数多くの事案に関わらせていただくとともに、国・県・市町などの審議会や委員会にも多数参加でき、大変有意義な時間を過ごすことができました。また、全国各地で毎年のように発生している地震や風水害などの自然災害に対する災害調査も積極的に行ってきました。災害調査の中で三重県にとって大きなものとして、平成23年9月に発生した紀伊半島水害があげられます。この年は3月に東日本大

震災が発生し、9月に和歌山県、奈良県、三重県を中心に台風による甚大な豪雨災害が発生しました。災害発生後、私が学会調査団の三重県担当となり、大学、行政、企業などの方々とともに3年間の調査研究を実施し、大規模災害の発生要因や今後の対策についてとりまとめました。現在の調査がきっかけで、調査に参加していた生物資源学研究科の岡島賢治教授がプロジェクトリーダーをつとめる、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)の共創の場形成支援プログラム「紀南オーブンファイル」構想によるみどりのアントレプレナー共創拠点」の取組につながっています。

ここで、私が在職中に取り組んだ社会連携の成果を2つ上げさせていたきたいと思います。一つは農学部卒業生である尾鍋氏が社長を務める株式会社尾鍋組と取り組んだ碎石を用いた地盤改良装置(エコジオ工法)の開発です。私が赴任した翌年の平成19年から共同で開発をはじめ、当初は失敗の連続でなかなか大変でしたが、3年目くらいからやっと製品として出せるようになり、現在では住宅の地盤改良工法を中心に全国で30,000件を超える施工件数を数えています。また、碎石は排水性が良いことから、この工法を用いた盛土地盤の排水対策について高速道路総合技術研究所と共同研究を実施すると共に、東日本大震災で被災した高速道路盛土の排水対策に採用されました。エコジオ工法は、自然素材の碎石のみを使用するため環境に配慮出来る工法として、令和5年には「碎石を利用した環境にやさしい住宅用地盤改良技術」で国立環境研究所・日刊工業新聞社共催の環境賞優秀賞を受賞しました。もう一つの成果としては、グラウンドアンカー工の健全性を評価する新たな手法(SAAMシステム)の開発です。グラウンドアンカー

工は、地震や豪雨による法面や斜面の崩壊を抑制することを目的に施工されている施設で、道路などの法面に数多く見られます。しかし、急斜面に施工されていることもあり、今まで調査が大変で健全性の評価はあまり進んでいませんでした。しかし、近年いろいろと不具合が見られるようになり、適切な調査が求められてきています。

これに対応するため、急斜面でも比較的容易に健全性の調査が実施出来る新たな手法を企業と共に開発し、大学発ベンチャー「アンカーアセットマネージメント研究会(SAAM研究会)」を立ち上げ、土木研究所や高速道路総合技術研究所などの協力も得て研究開発を進めてきました。SAAMシステムを用いたグラウンドアンカー工の調査手法は、土木研究所、高速道路総合技術研究所、日本アンカー協会、三重大学の四者で2020年に出版した「グラウンドアンカー維持管理マニュアル」の中にも掲載されています。

現在、本学の理事・副学長として大学の経営に携わっておりますが、今まで大学経営という面で大学を考えたことは無かったのですが、携わってみて大学が社会に果たす役割の大きさを実感しております。今後とも三重大学が社会に貢献できる大学となるよう微力ながら頑張らせていただきたいと思います。皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

## 近況報告

村上克介

三重大学を定年退職して、1年あまりが過ぎました。国立大学法人化の前日である平成16年3月31日に着任し19年と1日勤務

させていただきました。退職の日を無事迎えることができたのも、教職員の皆様また同窓生の皆様のおかげと存じます。厚く御礼申し上げます。

皆様方にはお元気にお過ごしのことと拝察いたします。近況報告を兼ねまして少しはお役に立つかもしれないことを記載したいと存じます。

定年後リズムの乱れや環境変化が体調に影響を及ぼすとは先輩方からお聞きしており、注意していたつもりですがやはり影響は大きいらしく、昨年5月ごろに片膝を痛めました。これと言って原因となるような思い当たるところはなく、最初は痛み止め内服薬や鎮痛の湿布など保存的治療によって快癒すると思っておりましたが、整形外科医に相談したところレントゲンによる状態は悪くはないとのこと、エコーを見ながら膝前後にステロイド剤を注射する処方を受けました。予想より時間はかかりましたが結果は良い方向に向かい、現在は特に支障なく生活できております。

以前から肥満状態にあり、血圧降下剤や血液脂質改善剤を処方されておりましたが、体重減はできないまま現役時代を過ぎました。膝の異常はまずは単に体重による負荷の問題だろうと考えました。幸い退職後で勤務に関わるストレスは無いため、体重減に挑戦することにしました。諸々の減量法がありますが、体に蓄えられた脂肪などを消費するしかないだろうと考えました。そこで日々の食料について、標準熱量などを見ましたが、ほとんどが栄養価の高い食品ばかりです。ここで「人類のあくなき食と農への挑戦」の成果を思い知ることになりました。とにかく「飢餓は避けたい」の一心で開発されたであろうすばらしい食品ばかりで、それはとても良いことであるのですが、逆に貧栄養食品はわずか

しかありません。「ワカメ」「もやし」「キウウリ」「キノコ類」などはおいしくかつ貧栄養の代表格であることもわかりました。

総栄養量の減らし方は、特定の食品に傾けると「続けられない」と思いましたので、概略「全食分量」をほぼ半分に減らし、脂質をとらないように注意し、空腹時の我慢に耐えかねるときは前述の数少ない貧栄養食品を活用したところ、割合早めに効果が始め、ピーク時に比較してほぼ10kgの減量を2か月強で達成できました。荷物を降ろした感覚で、その後体調も良くなりました。大体重長バランスから「ギリギリ肥満判定直前」に持つていくことができました。その後、減量にブレーキをかけましたが、なるべく節制を外さないように行動しているところ、体重はリバウンドなくキープできております。

結果、後期には2科目の非常勤講師を全対面講義で勤め上げることができ、また部屋の片づけを、お手伝いはいただきましたが、自分のイニシアチブでできたことをとてもうれしく思っております。

最後になりましたが、読者の皆様のご活躍とご健康を祈念申し上げ、近況報告とさせていただきます。

## 三重大37年と近況

奥村 克純

令和4年3月末で定年退職し、切換えが必要と思いつつ、ゆっくりという意識は全くなく、今もできることは何でもやりたい気持ちであります。退職後、無理にお願いして鈴鹿医療科学大学に1年お世話になりましたが、2年目からは、週2日、生物資源学研究科の産学官連携コーディネーター・

研究アドバイザーとして、ともかく老害にならないことを念頭に活動しています。研究面では、助けていただく形ですが、招へい教授として、科研費研究や共同研究などを続けており、結局、毎日のように大学に來ています。とはいえ、制約のない日が随分でき、風光明媚なところを妻とともに巡ることが現役時よりも増えています。

以下、自慢話になる懸念がありますが、前例に倣い三重大37年間を思い出のごとく書かせていただくことをご容赦ください。まず申し上げたいことは、どの取組みでも支えてくれる人がいたことです。共同研究者として共に活動してくれた研究室の学生さん、迷いや壁に当たると指針とした先輩教員のお言葉、役職時には、共に活動いただいた執行部・事務職員の方々のおかげでした。「誰のおかげで」と題した最終講義では、準備不足で、挙げる余裕がなく心残り、別にまとめたと思っています。

昭和60年、農学部農芸化学科生物化学講座（嶋林教授、田口助教授）の助手に採用され、「君は君の柱を立てなさい」とのお言葉に困りましたが、当時一つの課題であった変性した遺伝子組換えタンパク質の再生に目をつけ、S-I-S結合の再生酵素などで特許出願や論文を発表しました。タンパク質の構造と機能の研究には、先を考えると情報科学が必須で、計算機が不得意で設備もなくどうしたものかと悩みました。異なる研究領域から食品やタンパク質を見つめ直してみようと思ひ立ち、留学を機に、全く経験のないDNAの世界を体験しようと考え、研究室同門会で田中実先生からいただいた情報をきっかけに、米国イェール大学医学部でヒトゲノム・染色体に関する研究に携わりました。ヒトゲノム計画が始まったタイミングで、それも意識して留学しましたが、あまりにも異なる分野で、テ

クニシヤンに教えるを請うところからはじめました。それでも米に加えて、独、仏、伊からの優秀な研究者の友人もでき、世界が広がる充実した日々を家族とともに過ごすことができました。修得したDNAの可視化技術が細胞核内のDNA動態解析にも役立ち、5年後の英国ケンブリッジの研究所等での数ヶ月の滞在を含め、ヒトゲノム解析と細胞核、特にDNA複製やエピジェネティクスなどの分野で、世界で先端を競う数多くの研究者と長年にわたり分野を超えて交流・共同研究することができ、最終的に学会賞というご褒美につながりました。食品やタンパク質を見つめ直すという当初の考えをもち続けたことは、企業の方と進めている食品成分等の機能性研究にもつながり、さらに「エビジェネティクスと食と健康」という研究領域に発展するものと期待しています。

管理運営でも求められることは何でもやろうと、2年間でしたが50歳で理事・副学長（研究担当）を務め、地域イノベーション研究科や伊賀研究拠点の設置、リサーチセンター制度や地域貢献支援事業、最近異なる形で復活した報奨金制度などを策定しました。研究科に戻り、改組等の関係から専攻長や学科長を4度も務めさせていただき、さらに定年直前の3年間は研究科長・学部長として充実しました。研究支援の充実や、前任から引き継ぎ良いところどりの新水産実験所の設置、その教員増、進行する大学教員削減に対応できる教育組織の改組などを担いました。最後の2年間のコロナ禍は、特に副研究科長の神原先生、橋本先生、研屋事務長のがんばりがあってこそ乗りきれたと感謝しています。コロナの時期にオンライン化と関連機器の充実などが加速し、学生とのタウンミーティングやビデオメッセージなどでむしろ私だけ目立

ち、多くの学生に覚えてもらえる良い思いをさせていただきました。

AIの登場など、5年後でも予測の困難な世界になりつつありますが、後進の方への年寄りのたわごとですが、チャレンジと前向き志向、野心も少し抱き自らを高める諦めない姿勢をいつまでも維持していただきたく、生物資源学研究科・学部の明るい未来を楽しみに、自ら主体的に活動する学生さんを世に多く輩出していただくことを期待しています。

## 近況報告

加治佐 隆 光

お話がありましたことから、私の近況報告を書かせていただきました。最近、このような随筆のようなものを書く機会が増えたと感じまして、記憶をたぐりましたが、生物資源学部教職員紹介パンフレットや、私より前に退職された先生向けの寄稿、三重大学春秋会の会誌などへの寄稿などがあります。ですが、定年以後のことを書くのは考えてみずと初めてです。どなたも上手にそのような時期を迎えておられるのだろうと想像しますが、私の場合には2年を経過したこの頃、ようやく日常が見えてきた感じですので、近況報告には良い頃かと思ひます。

2年前には、コロナの影響がきびしく、ハイブリッド（リモートだけでなく教室での対面講義も交えて実施）の授業も始まった頃でした。私はリモートだけの講義に慣れてきて停年間近でしたので、ハイブリッド授業はしませんでした。ですので、そういった過酷な前線からひとりで逃亡するようなタイミングで停年退職したのだと感じて

います。それに似た状況は全国の大学だけでなく高校や中学も同様だったので、各所で登校しない生徒や学生のことを見聞するたびに、コロナ被害の重大性が気になります。

よく退職後の仕事のことを尋ねられます。求人情報を見ても私のスキルに合った仕事は見当たらず、結局のところ、在職時に兼業となっていた学外の委員会参加の継続がそれに相当するのかと思えてきました。それらはいずれも水に関わる公的な委員会4つです。賃金の大きさから言えばほとんどアルバイトかボランティアだと思うのですが、今は時間的なゆとりができたので、事前に十分に会議資料の予習をできるようにしました。しかもそれらはネット検索だとかChatGPTなどPCの助けを借りてけっこう楽しくできています。先ほどのコロナの話とは逆にこの点、今の学生はとも羨ましいですね。

なお最後の話になりますが、現職中には私の場合、生活習慣病と言ったのでしょうか、体調不良的な感覚がけっこうあったように思うのですが、今はお気楽な散歩や減塩食などのおかげで、体調は格段に向上しました。近況報告として自慢できるのはこのことだけでいいでしょう。皆様のご健勝をお祈りいたします。

## 生物資源下の 23年間を 振り返って

岡垣 壮

ご縁があつて私は1999年11月に群馬大学から生物資源学部へ赴任しました。当

時は学部改組の移行期で、研究室は水産食糧学コースから資源循環学科に変わったばかりでした。中山輝雄先生(現教授)が2021年1月没)、大井淳史先生(現教授)が助手で、私が3人目のスタッフになりました。赴任後は魚類筋肉タンパク質の生化学的研究を始めました。水産製造実習の一環として竹輪や缶詰を作る実習も手伝いました。水産食糧の先生方との交流で、魚の流通や保管方法、加工技術、魚肉製品の製造工程を学びました。

赴任した翌年の春には南西諸島の研究航海に同乗させていただき、西表島と沖永良部島に寄港しました。10日間にわたる航海では多くのことを経験させていただきました。当時の船長は石倉勇船長で非常に豪快な方でした。

資源循環学科に完全に移行してからは、以前から行っていた血管生物学の研究も再開しました。その研究のためにトリの卵黄抗体の作成をしましたが、動物舎でトリの飼育をする際に脇田正彰先生(故人)には大変お世話になりました。当時の資源循環学科では毎週水曜の昼休みに勉強会があり、各先生がご自分の研究テーマがどのよう

に資源循環に寄与するかという話をしてくれました。現在SDGs「持続可能な開発目標」を良く目にしますが、当時の資源循環学科の先生方は真剣に「持続可能な資源の有効利用」を考えていたわけです。今振り返ると20年前に資源循環学科を立ち上げた先生方は最先端を走っていたんだなあ、と感じます。10年前に私たちの研究室は学部改組で資源循環学科から生物圏生命科学科に移籍しました。新学科ではとまどうことが多く、同僚の先生方、事務の方に多くのことを教えていただきました。

令和3年3月に退職後、生物資源学部のご配慮で1年間研究室の片付けをすること

を許されたので、長年の研究資料を整理することができました。自宅が狭いので資料を保管するスペースがなく、重要な資料だけをスキャナーにかける作業を続けました。私は子供時代に昆虫採集に熱中していた時期があり、北海道の私の実家を片付け

た時に、長年保管していた昆虫標本を三重に持ってきました。退職後時間の余裕ができたので、1カ月ほどかけて昆虫標本を整理しました。塚田森生先生に三重県総合博物館の大島康宏先生を紹介していただき、標本を博物館に寄贈することができました。現在はこのように少しずつ断捨離を始めています。私は前橋市(群馬大学)に住む頃から、週末はひんぱんに山登りに出かけていました。三重に赴任してからも県内のおちこちの山、岐阜県や長野県の山などに登りました。たまたま白山(石川県)の登山道で、高松進先生と後藤正和先生に出会う機会があり、それ以来数多くの山行、テント泊の縦走、沢登りに連れて行ってもらいました。

生物資源学部では数えきれないくらい多くの先生方や事務員の方にお世話になって、おかげさまで無事に職務を全うすることができました。現在も非常勤講師として授業を担当させていただいて、時々大学に来ています。今後とも微力ではありますが、学部のお役に立てることがあれば協力させていただきます。

## 退職してからは はや三年

吉松 隆夫

(2021年3月退職 浅海増殖学研究室)

2019年末頃から騒ぎが始まり、その後国内でも猛威を振るいだしたコロナ禍の最中、2020年には東京などの大都市では緊急事態宣言が発出され、学内でも対面授業の停止や多人数での会食の禁止、出張の自粛など、いつ終わるとも知れない鬱陶しい状況が続いていたが、学生の声のしない静かなキャンパスに毎日早朝徒歩でいつものように通い、マイペースですべきことを淡々とこなしてゆく日々は個人的にはそれほど嫌ではなかった。会議の多くがオンラインとなり肉体的及び精神的な負担は軽減されたが、ディスプレイを通してのうわの空の討議でどれほどの効果が上がったのかは不明とする。この時期、私は国際交流担当の副学長としての最終年度であったが、海外の交流校からの留学生の受け入れや派遣、また国際イベントの中止やオンラインでの実施への急な変更など、例年にならぬ苦勞も多かったことを記憶している。また海外では、大都市や南太平洋の島嶼国のように国自体がロックダウンを宣言したことにより渡航中の学生が日本に帰国できない状況や、逆に三重大学で学んでいた留学生が母国に戻れない状況も生じ、その対応にはこれも非常に苦勞した。またパンデミック故にすべての海外出張が中止を余儀なくされたので、この点では国際交流担当として何か良いものを残そうと思っていた身には辛いものが在り、非常に落胆した。2020年から21年にかけての海外出張の中止は退職直後予定のものも含めてその数



7-8回にも及んだ。

私にとって三重大学での最後の年となる2021年に入っても状況は悪化するばかりで、研究科の新年会、大学執行部の新年会、定年退職者の祝賀行事、卒業祝賀会等対面で人が集い飲食を伴う行事はすべてが中止となったと記憶している。またオンラインでの実施となった最終講義は誠に味気ないものであった。今から考えればお酒に目がない自分としては、体を壊すことなく無事定年の日を迎えることができたのも、これらの外的要因による強制的なアルコールの摂取制限のお陰かもしれない。そして2021年3月末をもって三重大学を定年退職することとなり、旧南伊勢町の養殖研究所時代から含めて20年近くをお世話になった三重を離れ自宅のある福岡に駆け戻った。退職後の計画は新型コロナウイルスの騒動により全くの白紙状態となり、また再就職の準備もままならないままでの帰郷であったが、ほどなく小倉の某専門学校で基礎生物の講義担当の非常勤職が決まり週に何度か通う生活を繰り返すうちにさすがの新型コロナウイルス感染症も収束の気配が見え始めた。

さて退職の日から3年がたち、世界レベルでのコロナ禍も嘘のように収まりすべての事柄が正常化に向けて動き始めている。私は今、大学教員時代に専門分野の調査研究や共同事業で何度となく訪れた南太平洋はフィジーにある南太平洋大学の海洋研究課程で、国際協力機構の海外派遣スキームを利用していただき水産養殖分野の訪問教授という立場で活動している。新型コロナウイルス感染症の発生により3年間ほど計画の実施が遅れたが、これまでの我慢の多い生活で身体の中に溜まり溜まったものを発散させながら、何か良い仕事をしてゆこうと考えている。体も頭もあと数年ぐらいいは何か持ちそうである。

## 学部改組の報告

副研究科長(教育担当)

木村 哲哉

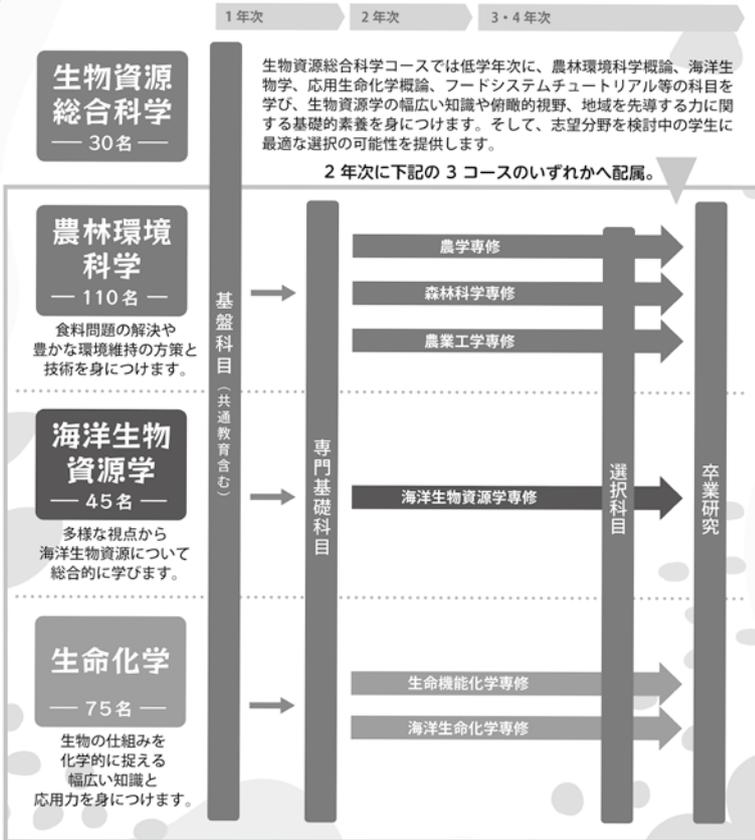
2024年度の新入生から学部のカリキュラム体系が、これまでの4学科体制(資源循環学科、共生環境学科、生物圏生命化学科、海洋生物資源学)から1学科4コース体制(生物資源総合科学コース、農林環境科学コース、海洋生物資源学コース、生命科学コース)に変更されました。多様化する受験生のニーズに加えて、SDGsやSociety5.0、気候変動や異常気象への対応、脱炭素社会やポストコロナのライフスタイルの変容など生物資源に関する課題など、ますます複雑化する課題の解決に向け、生物資源各要素の専門性とそれらを繋ぐ俯瞰的視点、フーディステムに関する総合的な知識、データ駆動型農林水産業やデータサイエンスの素養を備えた人材が必要とされています。そこでこれらに即した各専門分野の育成人数バランスへの柔軟な対応と、分野横断型の教育研究の創出を狙って生物資源学部を1学科とし、専門分野毎のコース制と各コース内に専門領域による専修制を導入しま

した。そして、何よりも直面する現実的な課題として、国立大学改革によって毎年のように教員数が減っていくなかでも教育の質を維持するための新たなカリキュラムの構築をめざして新体制がスタートしました。今回、新たな取り組みとして「生物資源総合科学コース」が誕生しました。定員30名というコンパクトなコースですが、1年時には専門を決めずに幅広く生物資源学について俯瞰的に学んだ後、2年進級時にそれぞれの専門分野を決めて残りの3コースへ配属されます。近年、入学早々に就学カウンセラーに対して、「自分がイメージしていた専門と入った学科の内容が一致していなかった」、「本当は何をしたいのかよくわからないうちに、周りの勧めで学科を選んだけれどもイメージと違った」という相談がしばしば寄せられるようになりました。最近では、他大学でも1学部1学科で入学をして、各分野の教育研究の中身を知ってから専門を選択する「レイトスペシヤリティー教育」を実施する大学が増えているのも、こういった受験生の要望が増えていることを反映しているのかもしれない。また、生物資源総合科学コースでは、推薦入試にいわゆる地域枠として、三重県・愛知県・和歌山県・奈良県の高校を卒業・卒業見込みの高校生を対象と

した「紀伊黒潮枠」を設定しました。これは、紀伊半島を中心とした地域の課題に取り組む意識をもった人に入学してもらい、地域の課題について考える経験をもとに、卒業後はこの地域に限らず、日本ひいては世界の各地域で課題の解決と発展に貢献できる人材を輩出したいという願いが込められています。そのために、1年から2年にかけて希望者には長期休暇を利用した海外研修も計画しています。第1期生となる本年度は多くの学生が受講を希望しているようです。従来の地域枠は、その地域に卒業後も残り医療や教育に従事することを課していることが一般的でしたので、生物資源学部の紀伊黒潮枠は従来にない新しい取り組みで、この枠で入学した学生の活躍を大いに期待しているところです。

他の3コースについても、従前の学科と一部が変更となりました。農林環境科学コースは、資源循環学科と共生環境学科の学問領域が一緒になり、農学専修、森林科学専修、農業工学専修という3つの専門領域となりました。卒業生の皆様は、ご自身が卒業した専門領域がどこになったのか、後輩たちはどこを卒業してくるのか心配されることと存じます。農学専修は、農学生物学コースとグローバル資源利用学コースを中心として1つの専修として

カリキュラムが一体化されました。森林科学専修のカリキュラムには大きな変更はありません。また、農業工学専修には農業土木系と農業機械系をそれぞれ中心とするカリキュラムが選択できるようなっており、基礎的な科目を共通で学修しつつ、それぞれの専門領域を学ぶ体系となっております。同窓生の皆様はご心配されると思いますが、資格取得や卒業後の専門分野への就職などにも配慮されたカリキュラムとなっております。海洋生物資源学コースは、1つの専修となっておりますが、カリキュラムの中には、海洋の気象を学ぶ科目も開講され、より幅広い視点で海洋生物資源の利用について学べるようになります。



ただけならと存じます。すでに4月から新しいコースで入学をしてきた学生の教育が始まっており、各コースの就学カウンセラーは新しいカリキュラムの説明から一歩を踏み出しております。引き続き2年生以上は従前のカリキュラムが実施されているため、当面は新旧のカリキュラムで学ぶ学生が混在することになります。当面は、就職活動を行う学生

私たちは旧4学科体制での卒業となりますが、今後とも同窓生の皆様におかれましては、新旧学科・コースを問わず後輩たちが社会に巣立つ際には仲間として迎えていただきますようお願い申し上げます。

コース構成  
(学部パンフレットより抜粋)

## 同窓会 会員名簿



- 11月上旬発行
- 予約限定販売
- 1部 4,000円(送料・税込)

会員名簿の購入等、名簿に関するお問い合わせは、名簿作成作業委託先(株)サトまで

**0120-975-816**  
(受付番号241117)

## 令和6・7年度 定年退職予定教員

令和6年度

資源循環学専攻

梅崎輝尚

松村直人

生物圏生命科学専攻

荻田修一

令和7年度

共生環境学専攻

取出伸夫

王秀崙

葛葉泰久

## 事務局からの連絡とお願い



一、本年度は「三翠同窓会会員名簿」の発刊「令和6年版」を計画しており、11月末日に発刊予定であります。名簿は最新かつ、正確であるべきで会員各位からの情報は欠かせません。また、個人情報保護法関係を忠実に厳守する必要があります。そのため、会員各位の了承を得て住所・勤務先・電話番号等を掲載したいと考えております。前回の名簿からの変更や記載内容に間違い等がございましたらご案内済みの確認はがきにてご連絡いただけますようお願いいたします。

二、本年度は、2頁掲載「会告」とおり「三翠同窓会総会」を開催いたします。

なお、総会の前に「三翠同窓会三重県支部会総会」が開催されます。当支部会は、三翠同窓会活動の基礎となる中枢的な組織で、本会の中の6つの構成同窓会が連携して三翠同窓会を支えています。さらに、資源循環学、共生環境学、生物圏生命科学、生物圏生命化学及び海洋生物資源学の各学科を卒業された方々も三翠同窓会を支えていただきますのでよろしく申し上げます。

## 編集後記



新型コロナウイルス感染拡大も収束に向かい、学内には学生の活気が戻って参りました。キャンパスにも新しい食堂として地域共創プラザがオープンし、国道23号線沿いに新正門が開通いたしました。また、学部改組で1学科4コース体制となり、私達教員一同も心機一転、新しい学生教育に臨んでいる最中です。同窓生の皆様には是非一度、新しいキャンパスに足を運んで頂ければと思います。

なお、本会報の編集は、三翠同窓会編集委員、苅田修一（三翠同窓会学内代表理事）、奥田均（農学会）、森尾吉成（農機会）、板谷明美（林学会）、坂井勝（志登茂会）、西尾昌洋（化学会）、金岩稔（勢水会）、および三翠同窓会事務局竹谷吉弘が担当しました。ご多忙中ご寄稿いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

最後に、同窓生の皆様のご健勝とご活躍を祈念いたしますとともに、引き続き三重大学生物資源学部ならびに三翠同窓会へのご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

坂井 勝 (平成19年卒業)

令和6年7月29日

# 三 重 大 学 三 翠 同 窓 会 発 行

〒514-8507 津市栗真町屋町1577  
(三重大学生物資源学部三翠会館内)

☎ 059-231-9677(代)

振替口座 00870-4-16556

E-mail: sansui-dosokai@bio.mie-u.ac.jp

## 個人情報 保護法に ついて

平成17年4月より個人情報の保護に関する法律が施行されました。三翠同窓会においても会員の皆様の個人情報を扱っております関係上、取扱には今まで以上に万全の注意が必要となります。

これを受け三翠同窓会学内役員会では、個人情報保護方針を次のように取扱方法を決めました。

### 三重大学三翠同窓会個人情報保護要領

本会は、会員の個人情報を適切に取扱う事を重要項目として個人情報保護に関する法律その他関連法令に従い、次のとおり会員の個人情報を細心の注意をもって保護管理を行います。

#### ①個人情報の収集について

本会は、適法かつ公正な手法で、会員の個人情報の収集を行う。また、収集した個人情報は正確かつ最新の内容に保つよう努める。

#### ②個人情報の利用目的

本会は、収集した個人情報を、会則に定める事項の遂行に必要と判断される諸事業（会員名簿の作成・本会及び三翠同窓会からの各種通信文書の送付等）にのみ利用し、それ以外に利用はいたしません。上記の業務遂行上、個人情報の取扱いを第三者に委託する場合があります。この場合は、本会は当該第三者において会員の個人情報を厳正に取扱うよう、役員会で協議し、適正な監督指導を行います。

#### ③個人情報の第三者提供

本会は、会員の個人情報を本人同意なしに三重大学及び会員以外の第三者に提供又は開示はいたしません。ただし、会則に定める事項の遂行に必要と判断される場合は、役員会で審議の上、その業務遂行の委託先へ提供させて頂く場合は契約書を取交わし厳正に監督・指導します。

#### ④保有する個人情報の安全管理

本会は、保有する個人情報を安全に管理するため、秘密保持には万全を尽くします。また、委託先においても適正な監督・厳正な管理を実施いたします。

#### ⑤保有個人情報の開示・訂正・利用停止

本会は、保有している個人情報について、会員ご自身はその開示、追加、訂正、削除、利用停止等を求める権利を有していることを認識し、会員よりこれらの要求があった場合には、関連法令に従い速やかに対応いたします。その際、第三者による情報の操作等を防止するために、公的書類の写しの提出を求め、ご本人からの申し出かどうかを確認することとします。

#### ⑥問い合わせ先

三翠同窓会会員名簿に関する問い合わせは次の窓口までご連絡下さい。

### 三重大学生物資源学部三翠同窓会事務局

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577番地

TEL/FAX: 059-231-9677

E-mail: sansui-dosokai@bio.mie-u.ac.jp